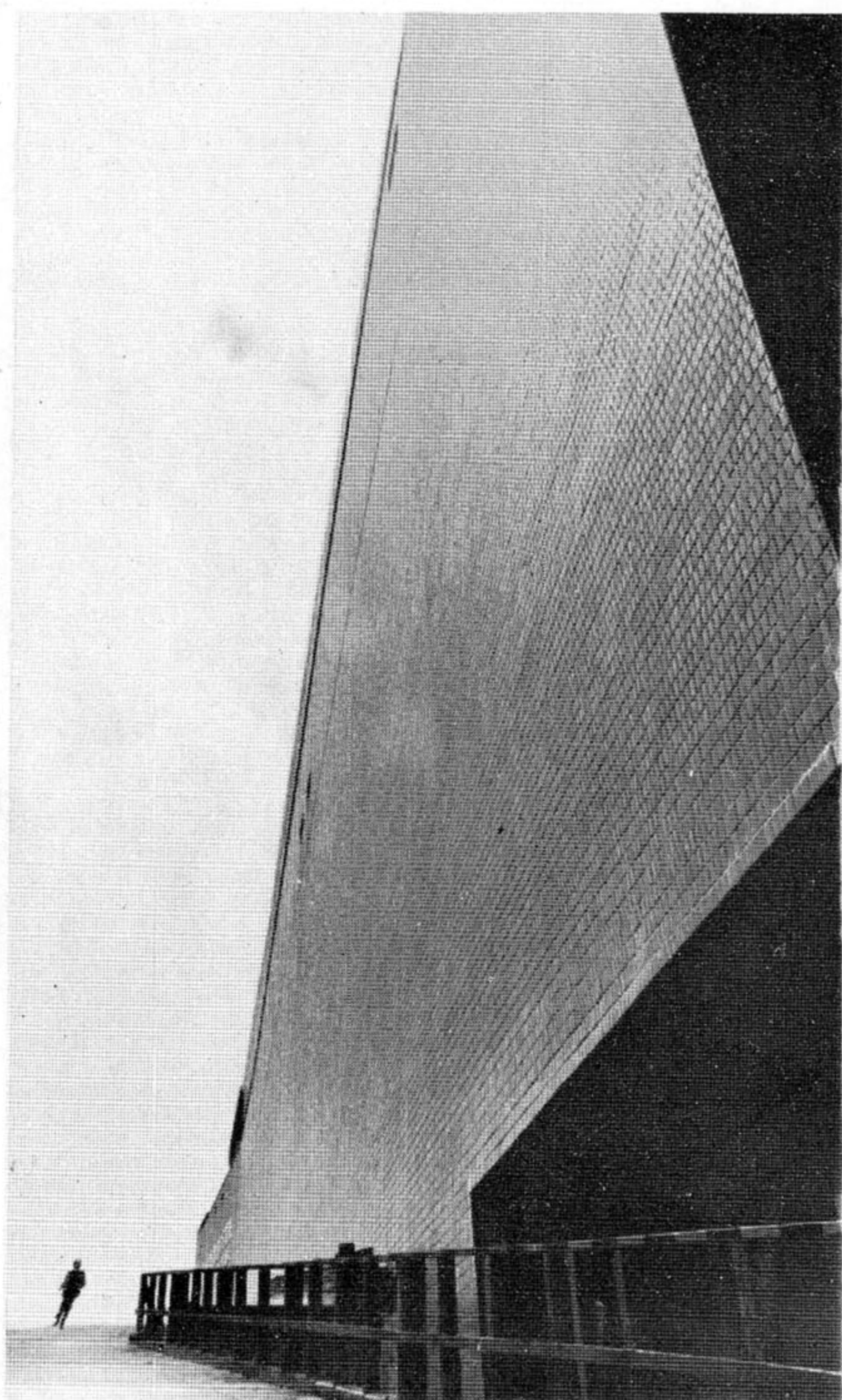


# Young Eyes / 53

全日本学生写真連盟会報

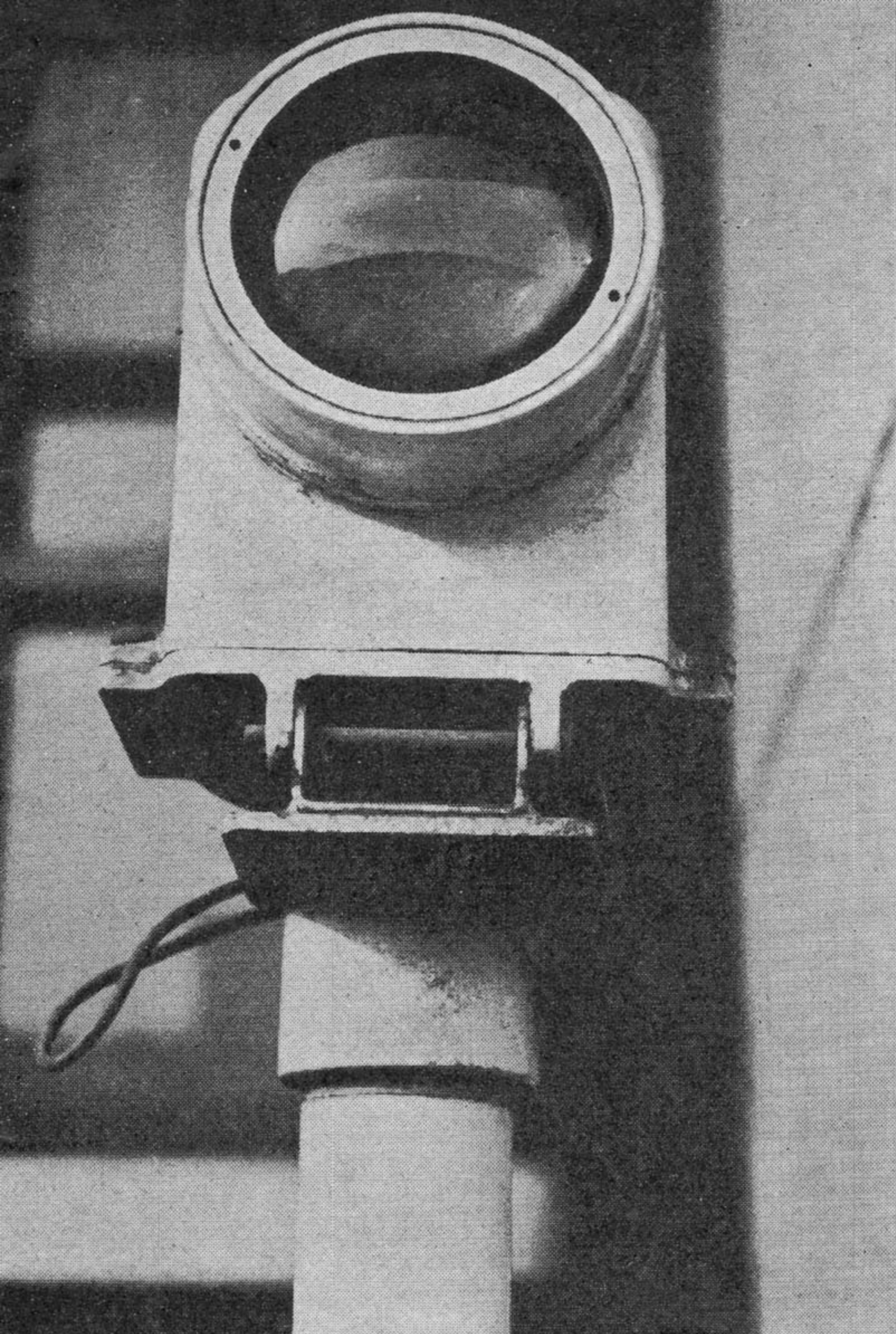






作品 1  
明治大学 小林 敏 雄





高校生のものか大学生のものか、多人数のものか少人数のものか、古いものか新しいものか、女性だけのものか女性僅少のものかを問わず、私達の学生・写真サークルの次期リーダーの人達は、次のことをしなければならないと思います。

それはサークルが、その年間の仕事のほぼ半分をなし終えた今、私達学生・写真サークルにとって最っとも重大なこと、つまり被写体をはじめとする写真(映像)化のいっさいの方法を選び考え、身辺のできごとの中にある、問題と原因を見極めようとする、またその作業を進める中で、なによりも眼前に、今起っている事実を卒直に認識すること、そして最後にそれら一切の作業の中心と出発点にサークル員個人と彼の写真を置くことが、あなた達のサークルでなされているかどうかを、できる限り多くのサークル員と一緒に検証する為の話し合いをしなければならないと云うことです。

そしてもしその結果、あなた達のサークルで、それらのことが、欠けていると判ったならば、あなた達を出発点として、あなた達とあなた達のサークルが、大きく成長する為の具体的なカリキュウムを作成しなければならないと思います。今すぐに――。

全日本部代表委員会



## 全日コンに期待する

茅 誠 司

写真をやっていて一番楽しいのは、印画紙に拡大して焼き付け、それをバットの中で現像するときだと思う。誰もいない暗室に閉じこもって微かな赤い光の下で印画が徐々にみえてくる時の気持は何ともいえない。この楽しさの因ってきたる原因は、精神をそこに集中して何事も忘れてしまう点にあるのではないかと私は思っている。

私は自分の専門の関係で、小さなコイルをしばしば作ったが、これも写真と同様で誰にも妨害を受けない場所で細い導線を丹念に巻いてゆきその巻数を数えて行くのである。巻数を一つ間違えると実験結果にそれだけの誤差が入ってくるので精神力をそれに集中せざるをえない。

近頃は、しかし、こんなことを楽しむ余猶はなくなって、コイルも自動的に作ったり、写真もジャンボのように只機械的に焼き付けるようになったので、素人写真家は、写真機そのものの精巧さに主としてその誇りを持つようになったのではなかろうか。

この時に学生の諸君が、且って私の若い時に楽しんだと同様に、暗室に立籠って写真の制作によって忘我の境を実現されることは殊に心嬉しい極みである。

聞くとところによると、今回は共同制作がその特長であるという。近頃は何んでも協力の世の中である。写真の分野でも共同制作というものが効果を発揮するという事実を如実に示して頂くことができるならば幸である。そして写真というものを通じて全国の学生諸君の間により理解が生れることを望んで止まない。

大 東 元 (朝日新聞)

写真は伝達の媒体であり、そのことは他の芸術の存在理由と同じである。しかし目的は同じであっても手段は各々違っている。そこに各分野の存在する意義があるわけだ。絵のような写真があったり、写真のような絵があったりすることは無駄であり馬鹿げている。文字の方がすぐれているなら文字で表現すべきである。

写真は写真以外になし得ない表現力をもっている。たとえば記録性、報道性、瞬間性といったものから独特の写真言語をもっている。だから写真不在の写真というのは全く意味を失うということになろう。まづ写真でなくてはならないということを考えて欲しい。

全日コンに期待するものは、年に一度のお祭りさわぎではない。写真趣味のすすめではない。大芸術に酔いしれることを教えることでもない。これは真面目に諸君の「学び」「考え」「実践する」あるいは創造する、発見する、開拓する、若い命の動きを、写真コンクールという場をかりて、その成果をみせていただきたいと願うばかりである。

具体的には紙数がないが、すくなくとも、組写真の部の余りや、そのついでにとったといったものが単写真の中に多いといったことは全く意義がない。何か映像のある印画紙を提出することが写真であり義務だと考えているのだろうか——組写真、共同制作には大問題と取組み勝ちな傾向がある。結構なことなのだが、事の手前でやたらに深刻がることで終っていたり、すでに取上げられている問題を拝借してもっともらしくみせかけたりする大人のズルサだけが光っているものが意外に多い。そこにはどう思い返してみても諸君がいないのだ。諸君のいない全日コンなどは無用であろう。その他で目立つのは創造することで飛躍がありすぎるということ、作者は当事者としてのわかり方をしているだろうが先へとびすぎて、君あるいは君たち以外のものには全くわからないというものが案外に多い。はなはだ残念な結果をよく示す。もう一度当事者としてのわかり方を検討してみるとよい。押しつけるのではなく内省し自己批判してみるとだ。それがないと昨年度のように素直な記録写真に拍手をうばわれる。

舌たらずで困るが、どうか一生のうちのある期間「学生」と限って催す意義と目的をよく考えてほしい。写真は自づからそこに生れよう。

奈良原 一 高 (写真家)

ヨーロッパ生活に於いてよく耳にした言葉の中で印象にのこったのは「美しい」という言葉の持つ意味の豊かさであった。彼等は云う、「航海は美しい」—「旅は美しい」……その様な時それは視覚的なキレイさというよりは「美しい心のともなった行為という事を意味しているのである」。

世の中の事はすべて愛する事から始まると思う。写真も又その例外ではなく、映像の世界を愛する気持から出発するのがふさわしい。愛情のない世界は不毛である。たとえそのテーマが不毛に対する抗議であるとしても、



そのえがかれた映像の世界はみずみずしい感受性によって支えられたものでなければならない。単なる知的遊戯としてだけの写真にたずさわる事を私は望まない。映像の世界が広く豊かであるためにはそれは単なる技術上の発展だけではなくそれにたずさわる人間の精神の豊かさを持たなければならない。

才能によるだけでなくその被写体の中に自分自身の世界を思いっきり広げようとした自由な心から生れたものであろう。

先ず我々は愛するものをためらわず、自分の考えた姿に表現する事から出発しよう。それはどんなものであってもよい、只必らず自分が興味を持ちそれに熱中出来るその様な世界をとり上げよう。たとえその写真が上首尾に終らなかったとしても我々はその行為から愛する心を得るであろう。形式からせめる 20世紀の初頭のユージェヌ・アッジェという一人の年老いた写真家がパリに居た。我々が写真の歴史をかえりみる時彼の写真は必ずそのはじめに現われて来るのだが彼の古い暗箱カメラでとらえられた世界はいつみても新鮮な印象を人々に与える。当時彼はパンとミルクでその晩年を生き長らえていたのであったが、彼がパリの風物に接する時の眼はきっと青年の様に弾力のある光を持っていたのであろう。彼の作品は老年を感じさせない。それは彼の事はやめよう。我々はまだ出発したばかりなのだ。形式は我々の心のすぎ去った後に残る航跡なのだ。それを追う事はあまりにもはかない事ではないか、我々は航跡を生む船となろう。



## 石 井 彰 (富士フィルム)

全日コンも第12回をむかえ、全国的なしかも小学生から大学生までの総合的な行事として大きなスケールに生長してきた。全日として、年間で最も大きな催しであることは勿論である。全日の会員が全員まず参加応募することに一番の意義があり、又広く会員以外の学生達にも呼びかける運動をしてもらいたい。そこに全日コンの意義があり、又全日の存在を社会にPRするチャンスでもある。

作品の優劣を競うより、先づ一人でも多く参加することである。世界をリードする面々では、学生達の健全な運動がその面の文化の芽生になっている。

写真コンクールで一番気になることは、模倣の作品が多いことである。皆さんの眼で自分達の身近な生活をみつめ、学園の中に、社会に、現代日本の建設的な若さを、新鮮な心で捕え写真化してもらいたい。今まで参加の少なかった、カラー写真、科学写真、共同制作の部門に、今回は特に期待しております。

# サークル内 に 於 け る 個 人 の 態 度

我々、写真サークルに属している人間は、写真を通して「人間とは何になりうるか」「自己の運命を支配できるかどうか、自己を作ることができるかどうか、生活を創造できるかどうか」という問いに答え続けてゆかなければならないのである。それらの問いに対する絶え間ない解答の探究が、写真活動の一本の糸であると思うのである。しかも写真活動(一つの文化創造である)をめざす人間にとって、果して、人間の力で文化をいかなるものになしうるか、創造できるのかどうか、という問いを發することは、そのような問いを選択したということ自体の中に、人間としての主体性が行使されているのではなかろうか。一定の結論も解答も与えられておらず、全く未知の未来に対して、ただ単に方向感覚のみで、「写真活動を通して、より良い自己の生活の創造、より良い社会を」という目的意識を持って飛び込んでゆくことによって、今後の活動の中で一人一人が、「我々自身と他の人々について熟考したことから」また「我々が何であり、何になりうるか、我々は現実に我々自身の創造者、我々の生活の創造者、我々の運命の創造者であるのかどうか、またどのような限界内でそうであるのか知ろうと望むこと」から明白にされて行くであろうし、そのように常に絶え間ない努力を繰り返さなければならないのである。

現在の社会の様に状況が複雑であり、又、細分化されつつある状況の中で、ややもするとこれらの状況の中に押し流されやすい、そして主体性の喪失した人間の集りの中でぬくむりのみを感じ取って、真の幸せではないかと欺瞞と幻想の中に溺れ、現実の問題から人間の真の欲求と不満が、生活からかけ離れた天下泰平ムードの中に隠されている風潮が満延しているという事実は否定出来ない。しかしながら、「我々の真の幸せとは何であるか」と追求する必要がある、「ぬくむり」のみが我々にとって幸せなのかどうか考える必要があろう。この様な状況の中で、我々が属している写真サークル内にもこの様な風潮が満延していることも事実である。それぞれの目的意識を持ったサークルであるはずであるが、この目的意識を明確につかめず、ただ惰性のみで過去から現在に引きつがれてきた、又未来にもこの様にして引きつがれようとしている。

まさに、我々サークル人は、一人一人が「サークルと

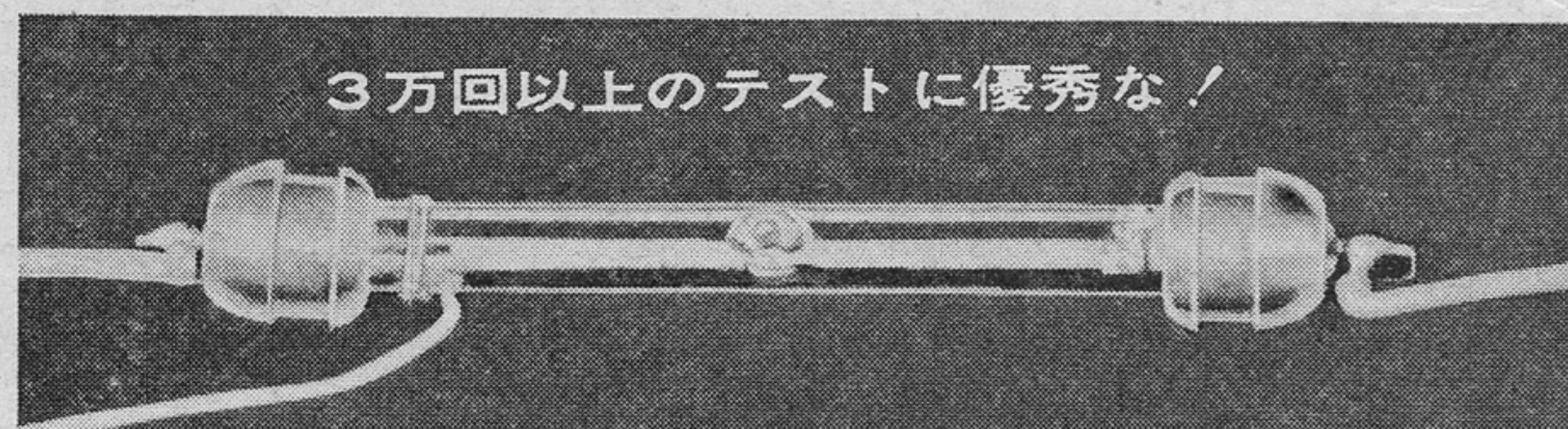


は何であるか」「サークルに参加する事によって自分が何を学び取ることが出来、この学び取ったことを自己の人生にどの様に生かして行くことが出来るか」考えてゆかなければならないと思う。サークルに参加することによって、それぞれの活動の目的を明瞭に意識し、その実現の展望を明確にもつときこそ積極的なものとなり、永続的なものとなって個々の意識の変革を出発点とし、個々の生きている社会に発言し、働きかける所に、サークルの中にいる個々の態度があるのである。そこに於いては個々の考えはサークルとしての絶対数的に統一してはならない事であり、命令という形を持って個々の考えを絶対に犯す事が出来ないのである。その中に於いて相互の批判を行い、個々をより高い次元に持って行く所にサークルとしての組織の必要性が出てくる。要するに、組織の中の個々は、全く一方的に組織に従属しなければならないというのは、非常な時代錯誤であり、組織は、個々の利益を全く無視してよいということ、いかなる執行部であっても出来ないことである。かつての天皇制イデオロギーは「滅死奉公」を求めていたが、この種のイデオロギーを民主的なサークル組織の中へ持ち込んで、組織の人間に私生活などというものはあり得ないとか、執行部の決定には絶対に服従すべきであって、個人的な理由から反対したり、実行不可能だと申し立てるのは、いわゆる個人主義的であるとか、日和見主義にはほかならないとか、主張する指導者も、よく見受けられる。しかしながら、組織の力を終局的にささえるものは、ほかならぬ個々の力である。それ故に、個々の長所を理解し、その能力を育成することは、とりもなおさず組織の力を強化することになるのである。個々を大切に、その私生活を保護し、その能力を育成するために組織の側から協力することを怠ってはならぬわけである。ここに於いてサークルに属している個々は、個々があってサークルがあるのではなくて、サークルの中に個々があるという意識を持たなくてはならないのである。そこにあるから、又、そこの中には何かあるだろうからという意識は、サ

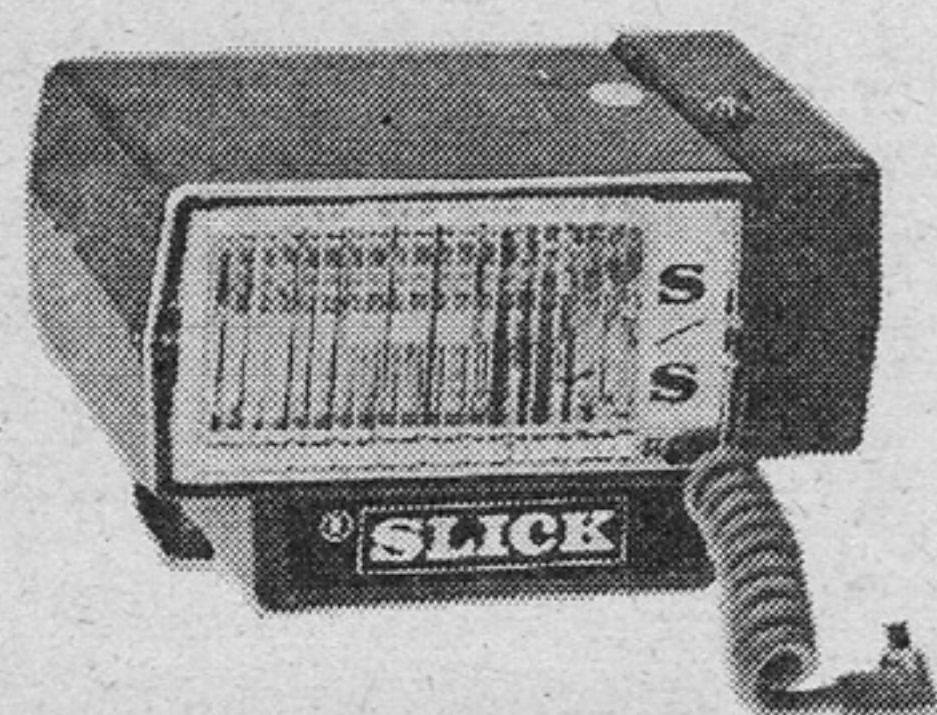
ークルに属するという動機のみであって、そのままの意識で属しているということは、個々に取っても、サークルに取っても何物をも生みださないであろう。個々は積極的にサークルの中で利益を見つけ出し、自己の生活の創造をサークル内の他者から、あるいは自ずから、それぞれの葛藤の中から生活の創造を見つけ出す必要が個々の態度として要求されてくるのである。写真サークルに参加し、一つの組織的な活動にたずさわっていて、写真を単なる好奇心や趣味にゆだねないのは、それ自体、我々の主体的な態度と認識があるからである。すなわち、組織形態の中に参加することによって自己の人間関係の領域を広げるばかりではなく、その組織全体の社会に対する働きかけによって、現在の自己の存在を明確にしているといえるだろう。そして組織に参加することによって、自己の孤立的な力では不可能なことが、あるいは可能になり、自己の狭い限界性を、幾分でも広げることが出来るのである。

我々写真サークルに属している人間が、カメラを持った時、ただ漠然とシャッターを押すだけのことなくカメラが、自己に取って「他との間の関係」を媒介するのであり、自己を表現するのであって、その意味では、カメラは単なる器具ではないのである。被写体に対して自己の主体性（自分がいわんとすること）がカメラに反映し、レンズは、それをフィルムに写しとる。その時写しとられた被写体は、自己の主体性（意見）を、当然反映するであろう。このようにして写しとられた、映像は自己の意見であり、他者との意見交換になる。そして、他者の映像を見ることによって、自己の映像を批判し、他者の映像を批判する。この過程が展開されることによって、お互いの主張の中から学び鍛え合う相互交流や補充が行われ、さらに新しい認識とそれに基づいた写真創造活動が展望されるようになるのである。この様なサークルにあって個々が成長し、それがとりもなおさずサークルの成長となってくるのである。

中央大学写真会 館 石 理



3万回以上のテストに優秀な！



それは放電管が「イノチ」です。世界でも最高の放電管を輸入して作られたストロボで、いつどんなときでもあなたのお供をします。

定価 本体・バッテリー(単3、4本)  
¥8,800 ACコード・DCコード  
露出計

スリックストロボは  
どうして小型で光が  
強いのでしょうか？

株式会社 スリックス

一式付 ギンザサービス 東京・銀座8の5(中銀座ビル)  
TEL (571) 6330・2274



# カメラサークルにおける

## 女性

戦後、強くなったものに、女性と靴下があると、よく言われる。靴下は認めるとしても、一体、女性は“どの様”に、強くなったのであろうか？そんな疑問を持って聞いてみた、もちろんそれは、大きな石を持つ強さではない。

最近の学生写真界に於て、女子の進出は、目覚ましいものがあると思います。元来、一般に女性は、理科系統に弱いとされていましたが、物理的、化学的知識を必要とする写真の世界に進出して来たということは、昔では考えられなかったことかも知れません。今日、ここまで女子が伸びたのは、技術的には幼ない知識であっても、美的感覚とか、物事の考え方に、男も女もないからではないでしょうか。

女子写真サークルの歴史というものが、男子写真サークルに比べて、浅いところが多い様です。最初は、お嬢さんの趣味といった安易な考え方から、出発したサークルも多いでしょうが、最近では、男子学生に負けないだけの立派なサークルも、ふえてきたようです。しかし男性との差を痛切に感じることもあります。例えば体力的な差。200ミリの望遠レンズをつけ、手持ちでのスローシャッターは、細腕の女性では不可能です。又、撮影地にしても、女性の行けない所があります。しかし、この点は又、美容院など女性でなければ、行けない所も沢山あるので、差ではないでしょう。ただ、撮影に際して女性は、目立ちやすく、カメラをすぐに意識されるという不利な点があります。

サークル運営に関しても、色々と不便な点があります。女子は夜遅くまで外出できないので、それだけ男子より活動時間が短いということ。又サークル活動に参加する心構えの甘い人が多いことも、運営上、困難なことの一つです。学生の写真サークルの目的が、写真を通じての親睦のみであれば、何も特に写真サークルに限らなくてもよいでしょう。

女性の場合、写真を通じて社会に目を向け、自己の考えを發表したいという意欲のある人が、少ないのではないかと思います。女性は社会に対して、自己を社会の中においてみるのではなく、社会の一部である家庭という一歩さがった場所から見る場合が多いのではないのでしょうか。物事の見方、考え方が、女性の場合甘いといわれることがあります。その反面、女性特有の繊細なカメラアイで、事物を捕え、日常的な、ふと見逃がしてしまう様な事柄を、写真にするという特色が、あると思います。又、素直なカメラアイで、物事を頭で考えるより

先に、身体で感じとって、それを写真に現わすのも、女性の特色でしょう。

女子写真サークルに於ても、最近、組写真の制作が盛んになり、共同制作についても、色々と考えられる様になって来ました。女子写真サークルの歴史が浅いので、共同制作の歴史は、一層浅いのですが、それだけに新鮮なものが、作られているのではないのでしょうか。最初、共同制作をするにあたっては、私達の先輩である女子写真サークル員が、随分苦労したようです。共同制作とは何か、という定義もはっきり分らないままに、男子学生の見より見まねで始めたのです。それだけに最初の作品は男子学生から見れば、これが共同制作かと首をひねりたくなる様なものが、できたのです。しかし今日、私達女子写真サークルは、共同制作をするにあたり、決して男子写真サークルの共同制作の亜流であっては、ならないという考えのもとに、新しい方向に踏み出そうとしています。

今日、曲り角に來た共同制作などといわれ、共同制作の問題点が色々と指摘されていますが、私達もそのことについては、除々に分ってきました。今まで、私達は共同制作のテーマにしても、男子学生と同様に社会問題を扱ったものが、多かったようです。社会問題の場合、女子は考えが甘く、訴える力がそれだけ弱かったと思います。技術的にも男子学生よりレベルが低く、訴える力も弱い共同制作なら発表の意義がないでしょう。勿論、作成過程に於ける相互扶助等、貴重な経験もあるでしょうが、出来上った作品は、人々に訴える力がなければなりません。

そこで最近、私達は共同制作をするにあたって、男子と同じやり方ではなく、女性特有の優しさをもって、違った角度から作っていきたいと思っています。テーマも社会問題だけでなく、日常私達が感じる、ささやかな不満なども扱っていきたいと思っています。

最後に、今までの私達を反省してみると、私達は女だからという甘えが、随分あったと思います。これからは主体性のある個人を確立する為、すべての点に於て男子学生に負けない様に、背伸びをするというのではなく、男子に学ぶべきところは学び、又、女性であるという特色



を生かした方向の写真に、進みたいと思います。その為には、最っと広く、社会に目を向け、自己の主張を持つ人間に、成長することが、必要ではないでしょうか。

写真を撮るには、専門的な知識も必要ですが、それと共に、あらゆる面の広い知識も必要です。それを貪欲に集めようというファイトをもって、進んで行きたいと思っています。

神戸女学院大学写真部 木原 敏江

## もっと積極的に

女子のサークルに入る動機、そしてサークルに対する考え方。ここに問題点があると思う。もちろん全部の女子がそうであるとは、もうとう言えない。これはあくまで私個人の経験によるものであるから、そういう方々には、お許し願うとして。

「ただちょっと面白そうだから」「聞こえが良いから」位の調子で、はたして本当に興味を持ち、深くそれを知ろうとして入る人達はどの程度いるのであろうか。それによってクラブへの情熱は大分違ってくる。

とはいっても動機よりも、入ってからのその人のやる気の問題がなによりである。女性の場合、言われたことをその通りにするのは、お得意である。もちろんその通りやってくれるに越したことはないのだが、それ以上には進まない。毎日が平穏無事ならば、それで良いという感じが大きい。活動すること。それはもう少し違ったものであるはず、もっと積極性のあるものだ。女性に欠けているのはこの積極性である。誰かが引っばってくればやれる。一人ではだめだけれど二人ならば。これが問題なのだ。ここが女らしいところなのだといえればそれで終りだが、誰でもやるきがあれば出来るはず。私生活ではともかくも、この場合はクラブに於いてである。しいては社会にも通じることである。

この様な状態では、いつまでたっても女子のサークル。私達の写真部は同じところを行ったり来たり、進歩が見られないものになってしまう。それこそマンネリ化である。

女性の持つ敏感な感受性、優しい心の動き、そして又鋭い批判と怒りはまるで見ることでできないうちに終わってしまうではないか。とても惜しい、悲しむべきことです。特に今日の写真ブームの中に於いて、女性写真はまだまだ発展の第一歩にあると思われる。女性でなければ気がつかないこと、撮れないものが沢山あるはず。そして女性の中の「私」でなければ撮れないというものを求めて努力せねばならないと考えるのです。

日本女子経済短期大学写真研究部  
石川 真希子

## 高校生と写真

高校生の位置は、中学生と大学生、一般社会人の間であり、子供と大人の間であると考えられます。子供から大人への代り目と言うのはとかく多くの問題を含むところでもあります、と言うのは今まで歩んで来た道がこの時いくつかに分れる分岐点へと差掛るわけで、可能性のきわめて多い現社会において、ただ一個の人間が直径20センチ位の頭の中に、色々な考えが乱れ飛ぶわけです。このような時期にある時、写真と言うものの存在は喜ぶべきことです。

写真はシャッターを押せば撮れます。しかしこんな受身的なことでは喜ぶべきことではないのです。能動的になるのです。写真は撮るのです。自分の足で前進して自分の手を伸し撮る。これが写真にとって一番大切なことなはずです。

このような写真は我々に現状をよく見せることをさせそれをいかに自分なりに表わそうとするかをさせてくれるものです。これは現状を把握し、その上に立って問題を考えるということ、ズバリです。

でも個人個人が自分なりに考えても分岐点の先は社会です。個人の集まりです。自分なりの考えがその社会にちょうど当てはまれば良いのですが、なかなかそんなことはないはず。そこでクラブというものがあります。その中に属する人々もちょうど同じ問題を持っている人です。話し合ひましょう、徹底的に。

要するに、我々高校生の時期は、全高校生がこの様な問題を持っています。それを写真部員は、写真と言うものの方法で解決していくわけです。

東京都高校写真連盟委員長 石田 耕一郎

高校写真部は何をすればよいか。なかなか難しい問題です。現在、我々はいろいろな活動を行っております。しかし、活動方針は現在のようなものでよいのか、またその内容のレベルはどの程度がよいか問題であると思います。

活動を行なうには目的が必要です。その目的はどのようなことなのでしょう。「短い高校生活のうちに人間関係についての知識を得、そして友人というものを得る。」これを目的とした親睦会・交流会などの活動が多くの学校で行なわれていると思います。しかし、これが最大の目的でしょうか。目的と思われるものはまだいくつも考えられると思います。「大人になる段階として、人間形成の場として活用する。」また、「ひとりになることによって自分を振返ってみたいという精神的（内面的）な追求。」それから、「写真技術についてよく研究する。」これを目的とした撮影会などの行事もよく行なわれてい



ます。もっと大きな目標はないのでしょうか。前に挙げた目的と思われたもの、それは“大きな目標”に至るまでの経過にすぎないのです。

では、この目標とはどのようなものでしょう。これを各学校の写真部の会合で、また各校代表者の会合で討論していただきたいのです。そして写真部が目ざしている目標というものを見つけだして下さい。

先日行われた中部の高校代表者の討論会で出された結論は、「写真部、またすべての文化サークル活動の最終的な目標は文化の向上である。」というものでした。つまり文化を向上させるために文化活動を行うのが文化サークルであるという意味です。

ここで話を少し他の面から発展させてみたいと思います。写真部とは比較的、個人の能力にたよる傾向が多いようです。従ってクラブと個人との関係に問題があるようですから、この点について考えてみましょう。写真部には「写真に関心がある。」とか「写真が面白そうだ。」という人々が入部して来ます。そしてクラブでの活動を行なっているうちに「写真が面白い。」という段階に入り、「写真についてよく研究したい。」という所へ到達するのです。しかし、ほとんどの高校写真部ではここまでの間に問題があるようです。それは活動に積極的でない人が出てくるということです。これらの人々に対し写真部は話し合い、注意し、引きとめてみて下さい。それでも離れて行こうとする人はクラブの価値を知ることができない、その活動によって得られるものがいかに良いものであるかわからない人であるとして、見送るべきであると思います。そして、残った人、つまり写真を研究する意欲のある人、この人々を対象として行なう活動が本来の写真部の活動です。

高校写真部の技術のレベルはどの程度のものがよいのでしょうか。撮影者が何かを見て、何かを感じ、それを印画として記録する。従って撮影者の感受性を大切にし、それを表現できるような技術を持つまでにしたいのです。これはそうとう高度な技術です。しかし写真は技術だけ

ではありません、アイデア、感覚などがともなってこそ技術の向上が望めるのです。このように、熱心に研究すれば高校生としての限界などは考えられません。では具体的に活動を挙げ、その内容について説明をします。活動は現在のようなものでも良いと思われるのですが、その内容としましてはあまりにも効果が少ないものが多いのではないのでしょうか。

撮影指導は各撮影会で一つあるいは二、三のテーマをうち出し、それに従って指導を行えばよいと思われます。この場合、指導員が必要ですので、主催者側は撮影指導ができるような人達に連絡できるようにしておくことが必要です。撮影会は交流という要素が含まれていることが多いようですが、技術指導とは時間を分けるなどして両者が効果を殺し合うことがないようにするべきです。暗室操作の実地指導は、まず書物で基礎知識を覚えてしまってから少し指導をし、経験と研究から独自の方法を作り出させるようにする。これは、やはり暗室にいた時間の長さにレベルが関係してくると思います。引伸しはやれてもフィルム現像ができない人が多いようですが、これは大変おかしなことです。ネガがあつての引伸しです。フィルム現像の指導にも力をいれてください。

作品の批評はやはり技術指導者がいた方が良いでしょう。指導者を中心にして持ち寄った作品について話し合えば効果的な指導ができます。この場合、人数は多くない方がよいでしょう。

写真部内で、または他校写真部との交流会などを行なう時には、ある程度の技術的なことを含み、写真を中心に、話し合いやすいようにするとよいでしょう。

実質的なことばかり並べてきましたがこの他にも全日キャンペーン・全日本学生写真コンテスト・各地区の写真コンテストなど沢山の行事に参加し、低調であるといわれている高校写真活動を盛り上げましょう。

中部学生写真高校の部 杉山茂太

好評！  
発売中

共同執筆

伊藤逸平  
伊藤美一  
桑原甲子雄  
佐々木基一  
重森弘淹  
田中雅夫  
津田新一  
福島辰夫  
吉村伸哉  
渡辺勉

装幀・東松照明

内容見本呈郵10円要

# 写真芸術事典

類書がない本格的写真理論の研究書です

A5判／384頁／680円

フォトコンテスト10月号  
特集▶学生写真に苦言を提す  
発売中・¥170

お申込みは書店振替で直接本社へ

写真同人社

東京都千代田区神田司町1～7  
振替 東京6667番



# 投稿欄

## ★ 52号「写真＝サークル＝共同制作」(福島辰夫) に意見殺到

確かに現在の共同制作、又学校単位制作活動は、発表の為の作製であり、展覧会の為の作品になりがちである。又他にも先生の云われていることが、現在大学写真部の実状であると思われる。しかし写真というものを我々が考える前に、横たわっているのはクラブである。クラブが写真クラブである以上、写真技術の向上も一つの目的である。しかし、クラブの目的には今一つ、それ以上のものがある。我部の現在の段階は、その今一つの方に重きを置いている。我部は非常に小人数であるから、共同制作の意見の統一は比較的楽にいく、又いかにいなくても個人の持味を上手に生かしていけば、克服できる

醇農学園大学 宗 田 周 次

大変興味深く読ませていただきました。我々、クラブのチーフは大いに反省し、今後ともより良い作品を創る様に心がけなければならないと思います。確かに我々の共同制作は、マンネリ化し無気力な状態にあります。ただ単に去年もやったから、今年もやらなければならないとか、合同写真があるから写真を撮らなければならないという態度ではいけない。我々は、義務で写真を撮り、組写真を作っているのではない。そういう点から、もう一度共同制作というものを見つめ、現実を直視して部員の個性と云うか、部員に主体性を持たせ、意欲ある態度で臨みたいと思います。

神奈川大 桜 谷 泰 之

種々な罵言の中に、彼の私達に対する暖かな視線を感じることができます。しかし、私達に必要なのは、そんなことではないと思うのです。老人には用はないのです。どうして人は、学生の写真や組写真の最近の傾向について述べるとき“マンネリ”という言葉を得意気に口にするのでしょうか、私には判りません。私はとにかく真実の意味で、私達の前途はかなり無限であると信じています。それに、彼の考えはあまりに定型にすぎます。最っとも一つの意見である限り、それも正当です。私は人間の意志の祈りとその神秘的な力と天の偶然を信じます。だから行動します。行動しようと意志します。

京都大学 清 多 英 樹

本当にこの通りであると思う。実際、共同制作にはいろいろな困難を伴うものであるということが、自分達の経験からもよく分かる。僕達の経験から、幹部が何人かいて、それぞれの考えを持って、自分のテーマをとりあげるように主張する。それが一つにまとまれば良いのだが、それぞれの写真の好みというものがあるし、なかなかまとまらず、最後には喧嘩腹になってしまい、とうとう二つの列を作ることになってしまった。その後も、暗室使用の問題やいろいろなことでも、部内が二つに分裂してしまい、その収拾に大変だったことがあった。そんなわけで、僕達はコンテなど作らず、テーマだけ決めて、各自それに沿って写真を撮らせ、最後に全員一枚の写真は出品できるように写真を選んで、まとめていく方針をとっている。

修猷館高等 山 崎 喜 三 郎

★今年度の全日は方針などから推せば意欲的なことがわかる。しかし本部と会員とを結ぶものがない限り、上層部のカラ回りに終る危険がある。もっと地方会員を無視しない様に新聞・会報を出してもらいたい。

名古屋市立工業高定時制 竹 内 務

★会報に写真クラブの活動等を紹介したらどうでしょうか。もちろん頁数等に、制限があることと思いますが、学校を知ることによって、距離は離れていても、その地区のこと、その学校の生徒のこと等、心に何か残るものが、きっとできると思います。

千葉商業高校 小 沼 充

(編集部答)

その様な御意見は、あなたを始め、たくさんありました。全部高校生ですので、高校生の希望として善処したいと思います。ただ我々として、「わいわい主義」のクラブ紹介はしないつもりです。

★写真部に思う

私は、写真部員ではありませんが、先日、写真部の掲示板に「キャンペーン」と云う新聞が貼ってあり、学内のものにも呼びかけていました。私も文化サークルに属しているので、ちょっと興味深く読ませていただきました。全日本学生写真連盟と云う名も始めてでしたし、全



このページは、あなたの意見を全会員に聞いてもらおうと、設けました。

貴重な経験、苦情、写真界等、400字原稿用

紙3枚以内でお願いします。

送り先は、関東会報委員宛にお送り下さい。

送る際、原稿用紙の最後に「会報投稿」と書き添えて下さい。

国の写真部員が全て、社会に対してあのような考えを持っているのかと思うと、私は、自分になさけなくなりました。と云うのは、私達のクラブは、上手になる為のサークルで、いつも夜遅くまで練習しています。私は、三年間それを、当り前のことと思って頑張ってきました。しかし大学三年ともなると勉強の方が忙しく、そう毎日夜遅くまで練習をしているわけにいかなくなった。それで下級生の練習を見て思うに、どうしてクラブと云うものは、その様なことばかりやるのでしょうか。

写真部でもそうでしょうが、そんな技術的な事だけがうまくなりたいなら、それ専門の道を進むべきだと思います。そんな嫌気のあるクラブ生活をしている時、この新聞を読んで感動したわけです。

写真部と聞くと、すぐピーンと来るのが、女性の顔を撮ったり、景色や日本の恥を見つけ出す様な写真等を撮って楽しんでいるものとばかり思っていました。がこの新

聞を読んで、私の考えを消さなくてはいけないと思うのですが、本当に全国の写真部員が、そのように社会に対して物事を考えているのでしょうか。それとも、全日本学生連盟の人達だけが考えていることで、他の写真部員には、関係のないことなののでしょうか。「キャンペーン」なんですから、まず全国の写真部員が参加し、それから私達の様なクラブに運動して下さい。そして写真部員の方達の云うことが納得できたら、私達も参加させていただき、全国の学生にまで広めて行った時、日本は、すばらしい国になると思います。その日が一日でも早く来る様に希望します。

全日本学生写真連盟「キャンペーン新聞」の良否を、討論する事より、組織を上げて、行動しようとする事が最っと大切な事であると思います。

井上昌之

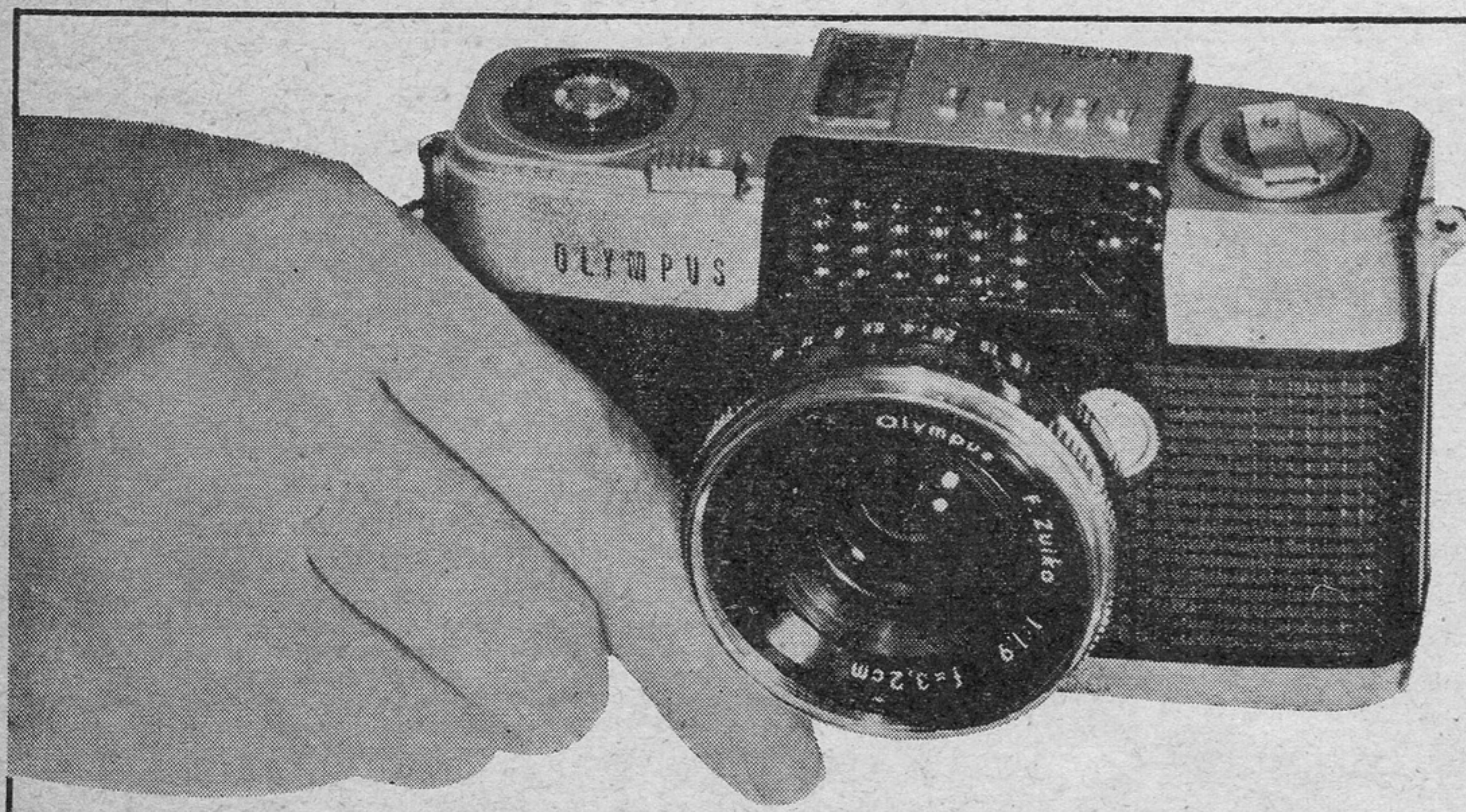
## モニター校

(大学の部)

北海道、北海学園、酪農学園、東北学院、福島、山形、慶応義塾、学習院、東京工業、大妻女子、神奈川、千葉、茨城、埼玉、名古屋女子、名古屋商科、同志社、京都、立命館、関西、近畿、甲南、関西学院、神戸女学院、岡山、岡山就実短期、鈴峰女子短期、山口、福岡、九州歯科、佐賀、熊本

(高校の部)

札幌東、札幌第一、小樽潮陵、三笠、仙台第一、東北学院、大曲、共立女子、第一商業、江北、文京学園女子、早稲田大学高等学院、小金井工業、水戸第一、宇都宮商業、前橋工業、浦和商业、千葉商業、甲府工業、逗子開成、松任農業、野沢北、金城学院、名古屋工業、東山、浪速、大阪、尼崎工業、関西学院、奈良、新見農工、大竹、修猷館、戸畑中央



## 若者のカメラ

ポケットに入る手軽さ  
F1.9 シャープなズイコーレンズ  
ペンの最高級機です。

ペンD ¥13,000 ケース  
ペンD2 ¥15,000 ¥800





# 学生写真・サークルの位置

## — その概略的意味 —

### <はじめに>

ここ二、三年来久しく、学生・文化サークルの低迷が学生の間で語られてきた。しかし、未だに「低迷」という言葉それ自体としても発展性のない状態を、切り開いてゆくための目標と方法を、誰れも提起できないでいる。そしてまた、私達の学生・写真サークルの低迷ということもまた、久しく、私達の間で語られてきたことである。

その二つの問題は深く結びついているが故に、一方のみを採り上げて論じて、その問題を十分に解決することはできないということは、云うまでもないであろう。最終的にはそれをなさねばならない必要に迫られるとは思ふ。しかしながら、ここでは、学生・文化サークル全般の問題と、学生・写真サークルの問題を関連させて、その低迷の貌と因を探ろうというのではない。ここでは主として、学生・写真サークルの問題を採り上げ、考えていきたい。というのは、まず、自分たちの周囲について、一定の認識があって、はじめて他との関連を知ることができ、そして、自己と他者を同時に、又、更に深く問題の解決をはかることができると思うからである。それを比喩的に云えば、まず、片方が鳴って、初めて他の片方も鳴り、また、お互いに強め合って鳴る音又と同じなのである。

一方、その「学生・写真サークルの低迷」の声は、そのサークル員の間だけではなく、最近とくにプロ外作家批評家諸氏の口からも聞かれる。非常にジャーナリスティックなものもあれば、深く掘り下げた分析的なもの、そして、もっと直接的にサークル員との話し合い、又は、研究という形のものもある。それらの中には、私達が十分な評価を加えるべきものが多くある。私達は、これらの意見を積極的に建設的に採り上げなければならない。このことについても、上記のことと、同様なことが言える。

さてそのためには、私達の学生・写真サークルの諸種の問題を考える場を造成しなければならないであろう。それは、言ってみれば、天びんばかりの一方の皿、ないしは、分銅のようなものである。その「場」を造るのが全日の一つの重要な任務である。そこで、ここに、その「場」の造成のための大体の測量といった風なものを記述してみたい。それは、概略的なものになるであろう。だが、現在のように、学生・写真サークルについての話し合いが、部分的にある程度の充実はみせてはいるが、その部分部分が全体的にどの位置にあるのか見い出すために、幾分かでも、その意義を見い出しようとする。勿論、問題の最終的解決は、厳密構築された具体策にあ

るということは、いささかも疑う余地はないことである。

## I. 文化サークル

### 1. 趣味・親睦

普通云われている文化サークルは、厳密に云えば、単なる趣味・親睦を中心とするサークルと、ある一つの明確な目標をもつサークルに分けられよう。と云うのは、単なる趣味・親睦は、学生・文化サークルの目標には、なりえないからである。それは、私達が学生であるということからでてくることなのである。学生であるということは、事物を深く認識しようと望んでいる人間なのである。だから、彼の生活のすべての行為は、そのことに常に明確に結びついていなければならない。それは、あまりにも当然のことである。そう云った見方に立てば、「趣味・親睦」ということは、サークル運営上のみならず学生生活のすべてにわたって、潤滑油的な役を果すという点においては重要ではあるが、それ自体は目標にはなりえないのである。オードブルやディザードや食前酒といった風なものである。一体、そんなもので食事、こと足れりと思う人がいるだろうか。また、それとは別にここでは、そのようなサークルについて記述することは不可能である。なぜなら、まさに「趣味は論議の外」であり、親睦とは「楽しく愉快にやる」と云う、これまた「論議の外」のことであるからである。だから、たとえそれを試みたとしても、そこからは何も産み得ることはないであろう。

### 2. 目標

それならば、ここで記述しようとしている、或る一つの目標をもつサークルとは、一体何んであろうか？ つまり「ある一つの明確な目標」とは何んであろうか。それは先に述べた認識者としての学生と云うことと深く関連づけつつ、先に挙げた「文化サークル」という語句の分析をなすところから導き出し得ると考えられる。

まず、文化とは何んであろうか？。それは人間が常に止絶えることなく、より進歩しようとする意識である。もっと云えば、人間が社会的動物である（つまり、人間だけが、また、社会だけが、一方だけで変貌することはない）以上ということから考えれば、人間が彼自身に対して持つ、永久に、より進歩したいと思う意識と、彼が働き、生きている社会に対して持つ同様の意識の相関的な総体として考えられるのである。ところで、それならば「進歩」とは何んであろうか？。それは、人間というものが（病気について考えれば判るように）、精神と肉体（物質）の深い有機的な結合をした存在であることか



ら考えるならば、精神と物質との有機的な相関関係の上に立って、精神のより豊かな生気に満ちた状態に近づこうとする行動である。

### 3. 業務

次にそのような意図をもつサークルとは、基本的にはどのようなものであるのだろうか？。サークルの成員は自分の周囲（生活）に起る様々な出来事の中に、複雑に入り組んだ問題を見出し、その問題の糸を手操って、更に他の問題、または他者の問題へと、広く深くつないでいかなければならない。つまり、自分の生活と社会との現実的な関係を、多くの人達と話し合わなければならない。

更に、そう云ったサークル活動を掘り下げれば、その活動は個々の成員の一個の確実な自我と自己意識の上に成立し得るものなのである。つまり、自我とは、ある事物についての彼の感覚的な把握力である。云い換えれば直感である。認識の始源である。それは、譲ることも、分かつことも出来ないものであり、個性の根源をなすものである。そう云った自我を、様々な社会のしくみ、いかに適応させるかと云う方法をも具備したものが自己である。つまり、自己は自我の社会化したものである。この場合、社会は人間の欲望を満たす場である。この自我の社会化の場合、本質的に、いかなる自我も、どんな社会にも全面的、完璧に、適応し、満足できるものではない。勿論、それは、技術的な意味での社会化の巧拙の問題では断じてない。と云うのは、自我のもう一つの云い方は、欲望（want）である。欲望に一体、限度があるだろうか。だから、want のもう一つの意味は欠乏である。それは、社会が人間の欲望を前にして、恒常的にその生産物（単に物資のみではない）の欠乏にみまわれていると云うことを表わしているのである。だから、近代以前の人達は、と云うよりも、一つの社会のしくみが安定した時、そのしくみを操作する人々は、欲求を制限せよ

と迫り、それを倫理の問題にまで高め、正当化していったのである。つまり、日本的意味における「遠慮」がそれである。（中国的な意味でのそれは、将来を考察すると云う意味である。皮肉な言葉ではある。）自分の意志を卒直に人の前に提示しないことが美德とされ、それが許されるのは子供だけであり、もし成人がそれをしようものなら「彼は子供だ」と嘲笑を浴びせられるのである。女性は、人の前で自分の欲望や意志を表現してはならない方のもっとも極端な存在であった。

しかし、やはり人間の欲望は、たかだか人間の歴史以後、2,000年間ぐらいで出来上った社会の仕組みで満足出来るほど底の浅いものではない。事実、人間の進歩の歴史は、人間の欲望を可能な限り充ていこうとする努力なのである。無制限に広がる欲望を、単にそのままの形態（自我の状態）で表現することも不当であると同時に、逆にその欲望を無件、無制限に抑止することも間違いであることも知っておく必要がある。だから、私達は常に自我（欲望）の社会化とは、その或る社会への適応であると同時に、その社会では満し得ぬものを満すために社会を変えていくことでもあることを知っておかねばならない。

### 4. まとめと補足

この項の最後にあたって、以上述べて来たことをまとめ補足してみよう。

本来的な意味に於いて、文化サークルとは、人間の自我をいかに社会化させていくか、つまり、自己を形成するかという課題をもち、そのために各サークル員は、自己の生活の中に様々な問題を見出し、それを、他のサークル員と話し合い、更に問題点を明らかにするようにしなければならない。つまり、社会に対する人間の意識の形成を行う「場」である。しかし、その際、厳重に警戒しなければならないのは、その社会に対する人間の意識を、ある二、三のものに限定してはならないのである。

ベテランの味

セコンク

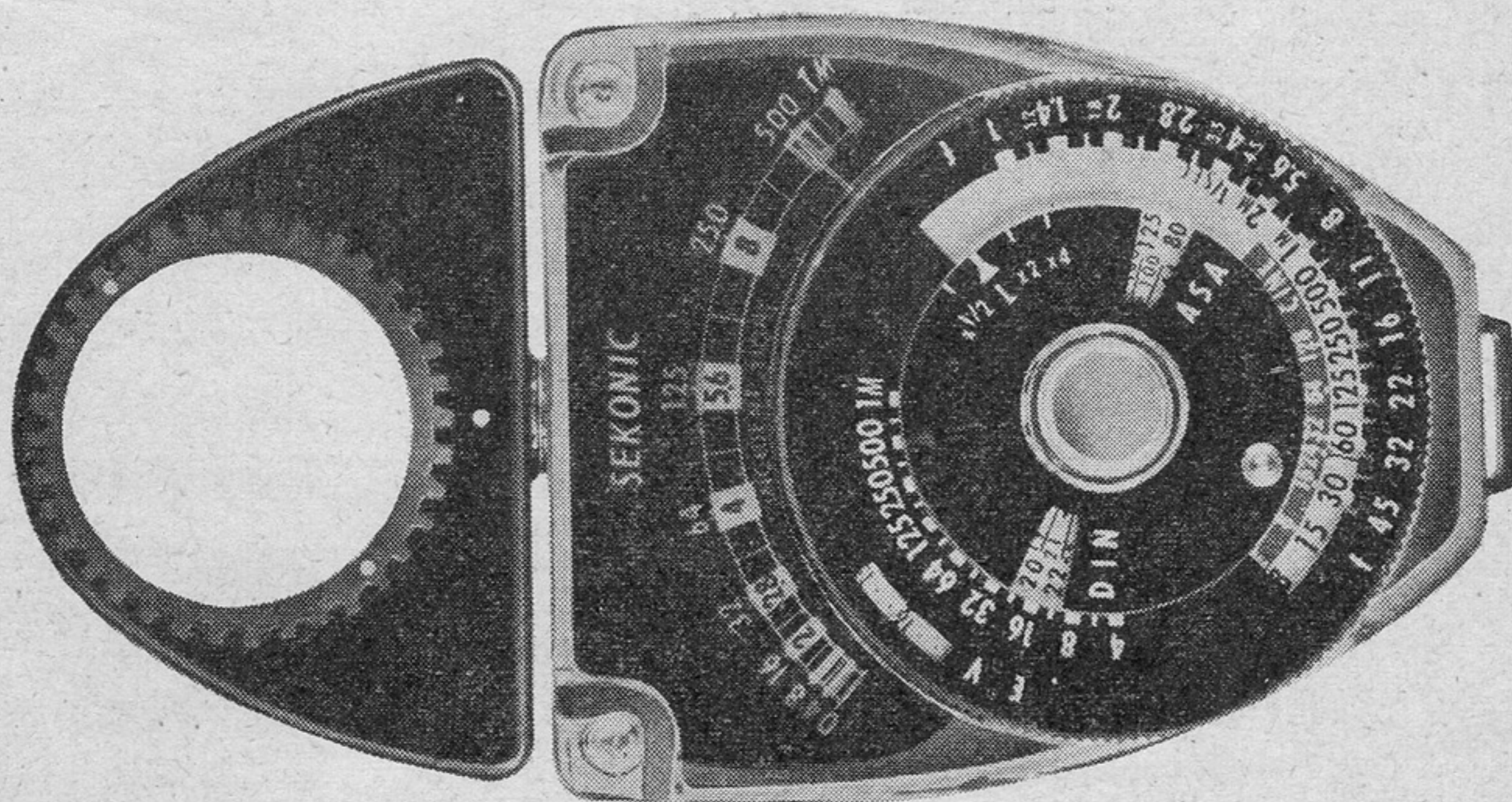
スタジオデラックス

L-28c

一度手にとった人は  
二度と忘れない



発売元 コパル





そうではなくて、いくつかの意見を相互にぶっつけ合っ  
て、更に高く深くものに變化させていくことが必要な  
のである。つまり、社会の様々な出来ごとに眼を向ける様  
にと要請はできるが、その社会の様々な出来ごとを、ど  
のように見よ、とは要請できはしないのである。

## Ⅱ. 学生・写真サークル

### 1. 関連づけ

前章では、学生・文化サークルを概略的に、“自分を  
もっと広く社会全体の進歩の意識を形成するための、自  
由な相互批判の場である”と述べた。次に私達の学生・  
写真サークルについて述べてみよう。それは、学生・文  
化サークルと学生・写真サークルとの関連について述べ  
ることである。それは、前者の範疇に後者は含まれるか  
とか、そうだとすれば、その中での位置、ないし役割は  
何か、ということを考えることである。この小文の目的  
が、冒頭で述べたように、学生の写真活動についての論  
議が高まりつつある中で、その論議の全体的な見地から  
の意味を考え、その論議に一定の脈略を作ろうとするも  
のである以上、確かに重要な問題である。しかし、また  
それらのことが、ある二、三の共通点を学生・文化サー  
クルと学生・写真サークルに見い出して無理やり関連づ  
けてしまうことになってはならないと思う。そこで、以  
上の二つの条件を同時に満すために、ここでは写真とい  
うもののもつ本質的な機能が前項で述べた文化意識形成  
にとって、どれほど有効かを考えることにしたい。

写真のものの機能という、例えば「記録性」や「瞬時  
性」であるとか、望遠・広角・魚眼等のレンズの様々な  
効果、また、その他、暗室の中での効果を考えるかも知  
れない。しかし、ここでは、そういった種類のより技術  
的な作画上のことでない機能について考えてみよう。

### 2. 「承」と「転」

本会報52号に福島辰夫氏は、「写真サークル——共同  
制作」と題して、次の様な、写真にとって極めて重要な  
問題を提起している。つまり、「……写真にとって、  
決定的なことは、現実と向かい合った時点においてしか  
なりたち得ない。」という提起である。皮相なみかたを  
すれば、この文章は、「あまりにも当然すぎる」かも知  
れない。つまり、「写真は被写体がなければならないの  
だから……」というみかたからすれば……。しかし、問  
題は、その辺にあるのだ。その考え方の背景には、「被  
写体、即ち現実」という考え方が存在している。それは、  
理論的には正しい。正しいには正しいのだが、この論理  
には「起」と「結」しかなく、「承」「転」がないのだ。  
そして、この抜け落ちている二つの部分の獲得こそが、  
写真制作活動を本質的に成立させているものである。活  
動の最も具体的な、活動の最も活動的な場面がそこなの

である。それでは一体、その場面とは何んであろうか、  
言い換えれば、被写体と現実とはどんな関係にあるのだ  
ろうか。

私達は、毎日の生活の中で、いろいろなことをいろい  
ろな形で知る。直接自分で見聞きしたり、テレビ、新聞  
ラジオといったマスコミからも、書籍、パンフレットか  
ら知る。そうしているうちに、自分の生活している社会  
のしくみや、その矛盾が判ってくる。ここら辺りまでは、  
多少なりとも物ごとを考えようとしている人達なら  
誰れでも行っていることである。違ってくるのは、社会  
のしくみや、そのいろいろな矛盾のうちで、特に強く心  
をひかれたものについて、もっと突込んで考えてみよう  
とし始めるところからである。しかし、突込んで、もっ  
と詳しく、具体的にとなると、いわゆる日常生活で得ら  
れる資料とか情報では間に合わなくなる。そして、更に  
自分の眼で現場を見ようとしたり、それと、自分の生活  
が、どんな風に関連づけられているかを知ろうと思うと  
決定的に、今どうりの生活では、できなくなる。それで  
も、彼が、それに踏み切った時、それが「起」である。

多くの情報と資料を集め、それを系統づけてゆくうち  
に、彼は、それらの妥当性や適確性を検査したいと思い  
始め、結局、それができるのは、具体的なできごとの中  
にしかないと考えようになる。そして、それをなんら  
かの形で表現し、つまり、自分を外化＝客観化すること  
によって、自分自身のできごとに対する認識力の厳密さ  
を計り、それを、他の人々に展示することによって、か  
って情報と資料を集める側だったものから、その逆の立  
場に転換し、批判を求め、更に自己の認識力を厳密化し  
ようとするようになる。それが「承」である。

### 3. 予測

もしも、彼が、これらの作業を写真でしようとするれば、  
それは、問題の設定と、それらの情報と資料あつめ（時  
には現地調査）そして、その映像化のための思考、すな  
わち、コンテの作成ということになる。コンテを作成し  
た彼は、それが二重の意味での「予測書」であることを  
忘れてはならない。つまり、彼が問題意識をもつにいた  
った現実についてのまず「予測書」であり、同時に、そ  
の予想された現実を具体的に、また、端的に表現しうる  
被写体についての「予測書」になるのである。

彼は、その「予測書」をもって、選ばれた現実の一断  
面である被写体に対する。しかし、ほとんどの場合、その  
予想は大きく裏切られる。いかに、その予想が厳密に検  
討されたものであってもである。それは、予想図作成の  
ための手ぬかりであったとかいうような問題ではない。  
それは、被写体を一断面とし、代表される現実というも  
のが、私達の予想よりも、はるかに豊饒であるというこ  
となのだ。それは、豊饒などという優しげなものどころ  
か、狂暴で全く性悪なものででもある。それならば、予



測は不可能なことなのか、そして、予想などということは、ほとんど何の役もなさないのだろうか。そうではない。予測は公正で、一般的、普遍的な問題、例えば、ヒューマニズムといったような事柄については、そういった側からの予測は成立するであろう。しかし、一体ある時代に、一般といったような場に生活している人達がいるものだろうか。そんな人間はいない。すべての人々が特殊なのだ。そこに矛盾があるのだ。普遍的、一般的な事柄と、個別的、特殊な事柄との接点、一体どこにあるのだろうか。コンテに描かれた現実、普遍的、一般的であり、被写体もその方向から選択されている。しかし、カメラマンの立ち向った現実、個別的で特殊であり、勿論、その被写体もその通りである。一体、この引き裂かれた彼の立場はどう処理すべきなのか。

#### 4. 「結」と「起」

とはいえ、眼前に転開されている個別的で特殊な現実を前にして、彼のもつ武器といえば、やはり「予測図」としてコンテと写真技術しかない。だから、もし、戦うとすれば、もっと立ち向っていくより仕方がない。(勿論、逃げれば話しは別だ。それは、この場合には考えない。) そうすれば、当然彼は、狂暴な現実によって、粉々に砕かれるであろう。彼は、その残骸をもって引き下がり、何故こんなにまで、みじめな敗北を喫したのかを考えねばならない。これが「結」である。いかにみじめであろうと、これが結末である。しかし、この場合、彼が何の予想も持たず、現実立ち向ったとすれば、彼は何の痕跡も残さず蒸発するだけであろう。予想を持つことによって、始めて、その戦いの意味と相手(現実)の出かたを知ることができる。そして、彼はそこから新しい予想を引っぱり出して、また現実立ち向って行くのだ。そして、そこにこそ、彼の成長と、ひいては社会全体の成長があり、それ以外の道はないのである。

だから「起」は、それ以前の「結」であり、その「起」は次の「結」に続く一個の円環である。そして、その円環は、らせん状に少しずつ少しずつ高所へ上って行くのである。数々の試行錯誤を繰り返しつつ、だから「被写体、即ち現実」は予想された現実→選ばれた被写体→予想されない被写体→予想されぬ現実→認識された現実→予想された現実……というらせん状のものとして認識されなければならないのだ。写真には、それができ、そこにしか成立せず、進歩がそこにしかない時、写真は明確に文化サークルとしての意義を担い得るのである。

#### 5. 原則の適用

「現実と向い会った時点においてしか、なりたち得ない」(福島辰夫氏) 写真の本来的機能は、絶えず仮説と実践を相関的に要求する性質であり、それは、進歩意識の形成にとって有効なものである。それは、概略的ではあるが、原則的なことである。原則はそのままの形では、

現実を変えて更に高い次元に押し上げることはできない。そんなことをしようものなら、現実、現在進行形ではなく、いつも過去完了形であり、固定化したものとしか見えない。それ故に、焦り、とんでもない無謀さの中に落ち込むことになる。しかし、原則は、依然として、現実を高めてゆくために、重要なことである。それなくしてはどのような行動もできない。もし、それなくして、行動したならば、確実に、いつも移りやすいもの、突然襲いかかるものとしか思えない。だから、まるで、季節の原則を知らなかったコオロギのように、確実に身を任せるしかないのである。うらぶれて……。とすれば原則と現実を一体、どのように関連づけるべきなのだろうか。それはまず、あの混沌とした現実を正面から受けとめる(「良いものはとり、悪いものは捨てる」などとこざかしいことは言わず)ことから始まる。次いで、直感を基礎とする悟性の働きによって、原則によって把握理解できる側面と、そうでない側面に分ける。そこで、その現実の意味するものが何であるかという仮説を前者の側面から導き出す。ところが、そうした仮説は当然備ったものとなる。つまり、その仮説は、ほとんどの場合後者の側面と比較検討した時に、その矛盾が露われるのである。それは、常にそうだといっても言い過ぎることではない。その矛盾が決定的なところまで来た時、他の人々と話し合うことは意味のあることである。その時、その人々も彼と同じ過程に達していなければならないのは当然である。そして、更に一層、矛盾は決定的なものとなる。そこからは、具体的な実践によって、それを統一する他はない。その際、矛盾している可能性が少ないと思われる仮説から、現実の中で適用すべきである。そうすることによって、圧力に関するパスカルの原理のように、その適用された仮説が他の仮説に影響を与え、その仮説の矛盾が事前に修正されてゆくのである。それは、結局、原則で把握できるものと、そうでないもの、仮説と実践の鋭い対決ということなのである。言い換えれば原則と変化させるべき対象たる現実を、その二者の緊張した均衡関係の中で、その眼前にある現実に見合った方法で、少しずつ順を追って変えてゆき、新しい現実を形成することである。ジャズの即興演奏、石工の石割り、つり鐘を指一本で動した話なのである。

全日代表委員長 三 崎 徹

(第3章は、もっと具体的に書きページの都合により次号に掲載します。)



# 低迷打破する各地区連盟

＜中・四国/東北/関東/なお関西は、8月29日「シンポジウム」を開いた＞

## 転換期に立った

## 中・四国学生写真大会

第7回中・四国学生写真大会が7月21日～24日の3泊4日の日程で松江市法眼寺ユースホテルにて開催された。この大会の発足当時の目的は、“中国・四国両地区の親睦・交流”であったが、この一・二年間この大会は果してこのような目的だけでよいか、年一回しか開催されない、両地区の唯一の交流の場であるこの大会について多種の批判があった。そして、一昨年の宮島でも、また昨年の徳島での大会でも、これについての問題が出ながら、具体的な方針までとは言わないでも、一貫した明確なものを決定しなかった。

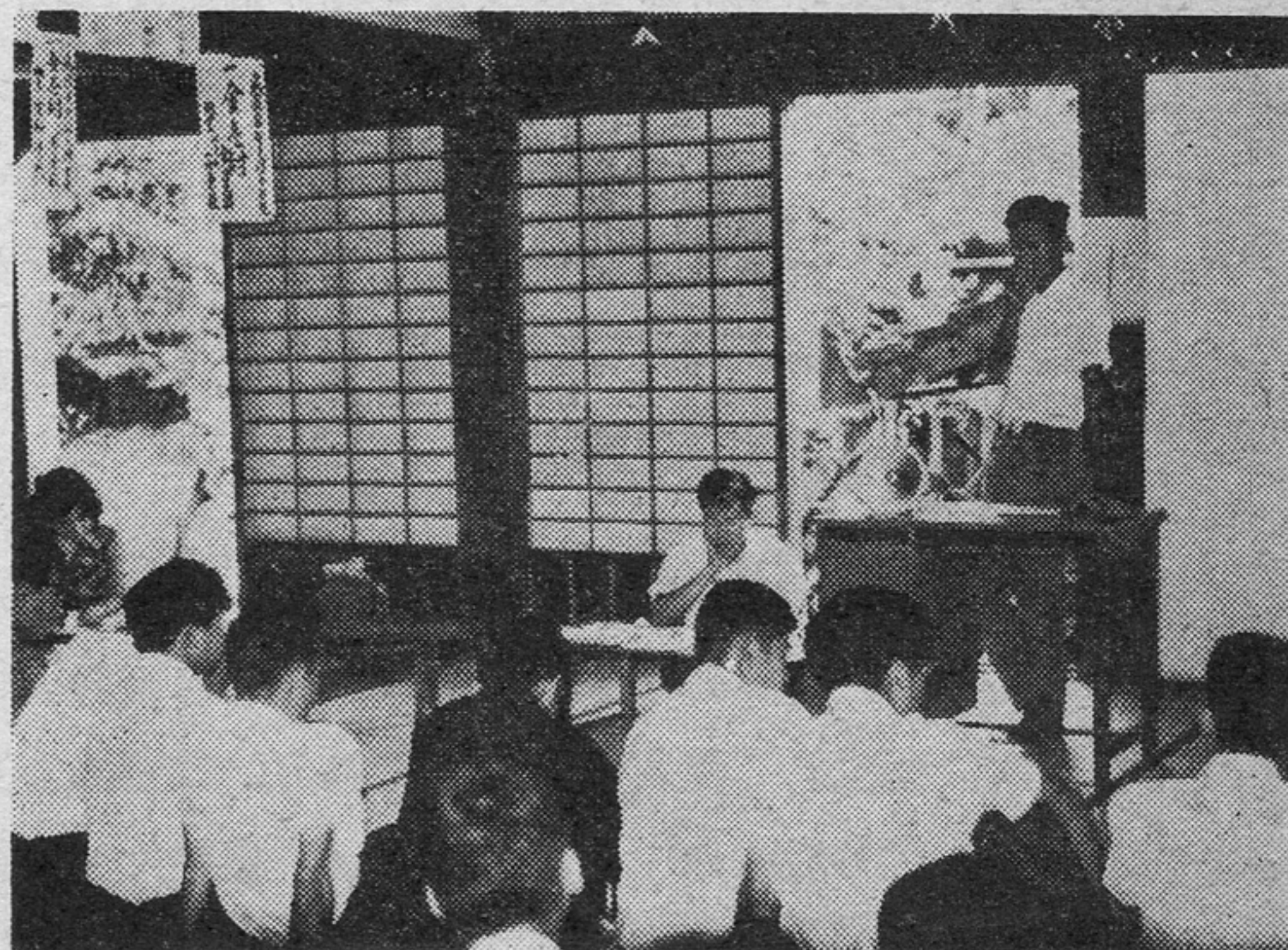
今回の大会では、この点を考慮して、大会内容に今までになかった“各大学研究発表”を加えた。大会の主な内容を述べると、7月21日午前10時から、22日午後3時30分までキャプテン会議、22日午後4時から24日の午前11時までは第7回中・四国学生写真大会で、主な行事は前述した各大学研究発表、福島辰夫先生によるスライド講演、出雲大社撮影、討論会、反省会、代表者会議などであった。

キャプテン会議について述べると、この会議の出席者は約40名（対象としていたのが各大学写真部長、連盟役員であったため）で、この会議の目的は、中・四国学生写真大会が転換期に立っている現在、この大会のあり方をさぐり今後の方向づけを行うために、大会の1日前に設けたものであった。この会議で図らずも同じような意見が大部分の学校からでた。そして、これらを総括し次のようなことが決定された。

“中・四国学生写真大会”は今までのような親睦・交流だけに重点を置いた、“観光的行事”では今後の発展・向上の可能性はないし、我々にとって重要な行事としてのウェート置くだけの価値もないし意義もない。そこでこ

の大会を意義あり、また連盟会員にとって魅力あるものにするには、リーダー養成的な中・四国学生写真の最高水準をいく内容としなければいけない。大学も連盟も指導者に恵まれない現状において、リーダーを養成することが非常に大切であるし、またこれが現在中国・四国地区にとって最大の問題とも言える。このための具体的な方針としては次期大会からは、中・四国両地区が抱えている問題を充分討議できるような機会を設けること、例えば全体討議、グループ討議の場を作ること、今回行なう各大学研究発表の充実化などである。そうすれば中・四国の真の交流もなされ、両地区共同でこの大会を開く意義もでてくる。そしてこれらの方針を達成するために、中国・四国両地区で、大会準備委員会を結成し、両地区が連絡を密にとりながら大会を企画していくこと、（今までは、担当地区に任せきりで、担当地区以外はほとんどノータッチで各大学からの積極的な意見というものが全々なく、担当地区の独断で大会内容を決定していた。）

7月22日大会の開かれるまでの時間、つまり10時から3時30分まで福島辰夫先生を囲んで“共同制作”を中心に中・四国が直面している問題について討議した。ここで話題となったものとしては、“共同制作の方法”“写真コンテストの良い面、悪い面”“短期大学における指導者の養成”“4年制大学と2年制大学のギャップ”などが主なもので、出席者すべてが現在頭を悩ましている問題ばかりなので活発な意見が続々とでたが、時間の関係で途中で打ち切ったのが非常に残念であった。しかし参





加者にとって大きな収穫を得、今後の写真活動に大きなプラスになるのではないかと思った。

午後4時から第7回中・四国学生写真大会が開催された。山陰地方豪雨という悪条件で交通機関が混乱していたため、最初参加予定者が約190名であったが、実際に参加した者は130名であった。また、この豪雨に大会は多分に影響され、参加者はいやと言うほど雨をあじわった。

今回から新らしく設けた各大学研究発表について述べると、このような形式のものは今までに全くなかったために各大学とも発表するのに手強い、準備不足が目立った。参加校の約3割は独自のテーマで興味ある発表を行っていたが後の7割は各写真部の状況発表となってしまった。これなど大会に対する消極的態度が表われたもので、各大学とも反省の余地があると思う。主なテーマを拾ってみると“共同制作の企み”“写真部運営論”“暗室技術（カラー真写、反転現像）”などであった。

次に福島辰夫先生によるスライドを用いた講演会について述べると、今までの大会での講演会は講師の一方的な話ばかりでレベルの低い者から高い者まで集まるので高いレベルで講師が話をされればついていけない者ができ、少し程度を落したもので話されれば高いレベルの者にとっては退屈なものとなってしまうていた。ところが今度はスライドを用い視聴覚の二面から講演されたので興味をもって皆な講演会に望んでいた。また済んだ後非常に好評であった。ただ惜まれるのは、リーダー達はキャプテン会議で福島先生を囲んで討論する場をもてたが一般参加者との討論の場を設けることができなかったのが残念であった。

23日出雲大社、松江市内を撮影して回ったが前述したように雨のため思うようにいかず、恨めしそうに空を見上げるばかりであった。

24日は23日まで降り続いた豪雨のため交通機関が大混乱していたために大巾に日程を変更し、反省会、代表者会議を行なって午前10時に閉会した。

この3日間の大会を通じて言えることは、大会自体いかなるものであるかを明確に認識せず、参加者一人一人に自覚が足りないことである。これは各大学内で解決できる問題であるし、また解決して欲しいものである。この大会に参加する前に各大学内で解決できる問題であるし、また解決して欲しいものである。この大会に参加する前に各大学内でこの大会について充分討議して参加するのが当然であるし、参加者が大会について深い認識と自覚をもって望むのが義務である。この義務を一人一人果たしたとき、この大会は一躍発展するであろう。

中国学生写真連盟委員長 妹尾 孚

## 東北講座

# 福島辰夫先生を

## 囲んで

### とうほくこうざ

東北学生写真連盟は去る6月21～23日に写真評論家・福島辰夫氏を仙台にお呼びして、写真及び連盟についての討論会を行った。当連盟がこれを企画したのは、東北地区は写真界との接触が殆どなく写真に対する認識が不足しているためである。最近のカメラ雑誌によってもこの不足が補えないのは明白である。また福島先生は会報No.52号に「写真＝サークル＝共同制作」の文章を載せられてサークル論も詳しく、全般に低迷状態にある大学サークルにも提言が与えられるのではないかと判断し、先生をお呼びした次第である。以下簡単にその報告を行う。

21日夜。連盟役員及び若干の希望者が先生を囲んで写真について、及び連盟について話し合った。まず現在一般に慣行されている言語のあいまいさが指摘された。例えば“学生らしさ”“アマらしさ”“プロとアマとの区別”などの言語。これらの言語では、写真の内容で学生なりアマ・プロと規定するようだが、これは我々の自由な思考態度に反するからそのような区別はあるべきはずがない。これらが広く用いられるのは写真に対する認識の甘さの風潮を反映しているように思われる。

次に連盟について。当地区も他地区にもあるように地域差が存在するという悩みを持つ。宮城・福島・山形三県の大学はある程度の実質を持っているし、かなり連絡はとれているが、青森・岩手・秋田三県とは余り連絡もとれていない状態である。これを解決する一手段として後の三県内に一支部を作ったらどうかとの案が出された。そしてこの支部が三県内の連絡をとるのである。現在、秋田県では大学写真連盟を設立する意向なので、これを支部にする方向も考慮する余地のあるように思う。最後にキャンペーンだが、当連盟ではテーマ“状況—1965”を単に1965年の社会の状態を捕えていたのに対し、全日の主旨—1965年に於ける個人の状況—を福島先生から説明していただき理解できた。これは全日総会を前にして、考え方が明確になっただけでも収穫であった。

22日午後。学連役員及び仙台市内・山形大学の幹事と先生とがひざを混じえて、今日問題になっている共同制作、またクラブのあり方等について話し合った。





まずそれぞれの大学に於ける共同制作の実態を把握し先生の意見を参考にしながら、問題を進めていった。我々が共同制作をする場合最初にぶつかるのが、コンテである。ある大学ではコンテと撮影がうまく結びつかず失敗したという。先生はコンテについて、自分の意見をいかにはっきり出すかが問題であり、写真の内容を規定しすぎたらだめになってしまう。撮った人がわかっている限り、コンテはいらないとし、想像する余地を残しておくべきであり、コンテは疑問形である。つまり、コンテは問題の提示であり、テーマへの予測であるから、コンテと撮影が一致しなくともそれはコンテからの発展である。また他に、個のないところに共同制作は出来ないと、その時その時、個性を作っていない限り、個性はなくなってしまうし、個は表現のないところには成立しない。また、個は永久に確立せず、無限に確立していく写真と人間の意識状態、それが写真にみられ、ある意味では写真はそこに人間に反映しているのである。即ち、共同制作は納得、妥協、説得、義務づけ、強制では出来ない。参加している人の主張でやらなければならないのである。

同日午後6時より高校、大学写真部員を対象とした“写真とは何か”についての講演会があり次のような内容について話された。(出席者約120名)

写真は捕えにくい、いつも考えるべき、答えは出ない問題である。また、写真で何かを表現することは特殊なことであり、色々な形で使える。写真の広がりについては、表現のための写真をともなった時、沢山の問題が出てくる。ある時は絵の模倣、美の追求、あるいはそこに生きている人間の撮影、つまり写真は記録する能力が非常に強いのである。写真は絵や小説と違って、自分の問題ではなしに社会の問題を人間的な目でみて捕え、自分にとって社会はこう見えたんだと訴えなければならない。自分の意味のない真写は人にとっても意味がない。また、何かに感動した写真ではないかぎり人に伝えることは出来ない。以上のようなことが話された後に、“地

球は若い” “人間の家族展” “Nothing Personal” のスライド上映を行い9時過ぎ終了した。

それに引続いて、スライド上映を希望者が集って行った。東松照明を中心にして“ナガサキ” “四日市” “古領一岩国” が上映された。それらの作品は我々が写真に対して興味を持った時期よりも以前のものであり、当時の日本写真界は活発な動きを持っていた。それが1961年頃から低迷してしまい(それは一般大衆運動に時期的にも通じるが、)それ以降に我々は大学に入ったのである。だから我々は“5人の眼” “ViVo” の運動の実態を知らないのであるが、それは無理もないとはいえ、知識の不足さに改めて痛感した次第である。

以上これが概要であるが、全般に皆が打ち解けた雰囲気話したのは良かった。最後にこの企画を実現して下さったフジフィルム株式会社に感謝します。

東北学生写真連盟委員長 多 木 和 夫

—◇◇◇◇—

関 東

## 共同制作 シンポジウム

関東学生写真連盟企画局は、学生写真界の低迷が叫ばれている現在、その低迷を打破すべくその現象が最も端的に現われている共同制作について6月15日全日本部の協催をもって明治大学に於て開催された。各大学から100名近くの出席者をみた。議題は次の通りである。

1. 共同制作とサークルとの関係
2. 共同制作と個人、個人写真との関係
3. 共同制作のなし得ること
4. 共同制作の発展性

共同制作というものは、元来サークルに於ける個人の発展の場であった。しかし現在その実状を見ると、果してそう云えるだろうか。その辺に学生写真界の低迷、あるいは共同制作の低迷が潜んでいるのではなかろうかと、

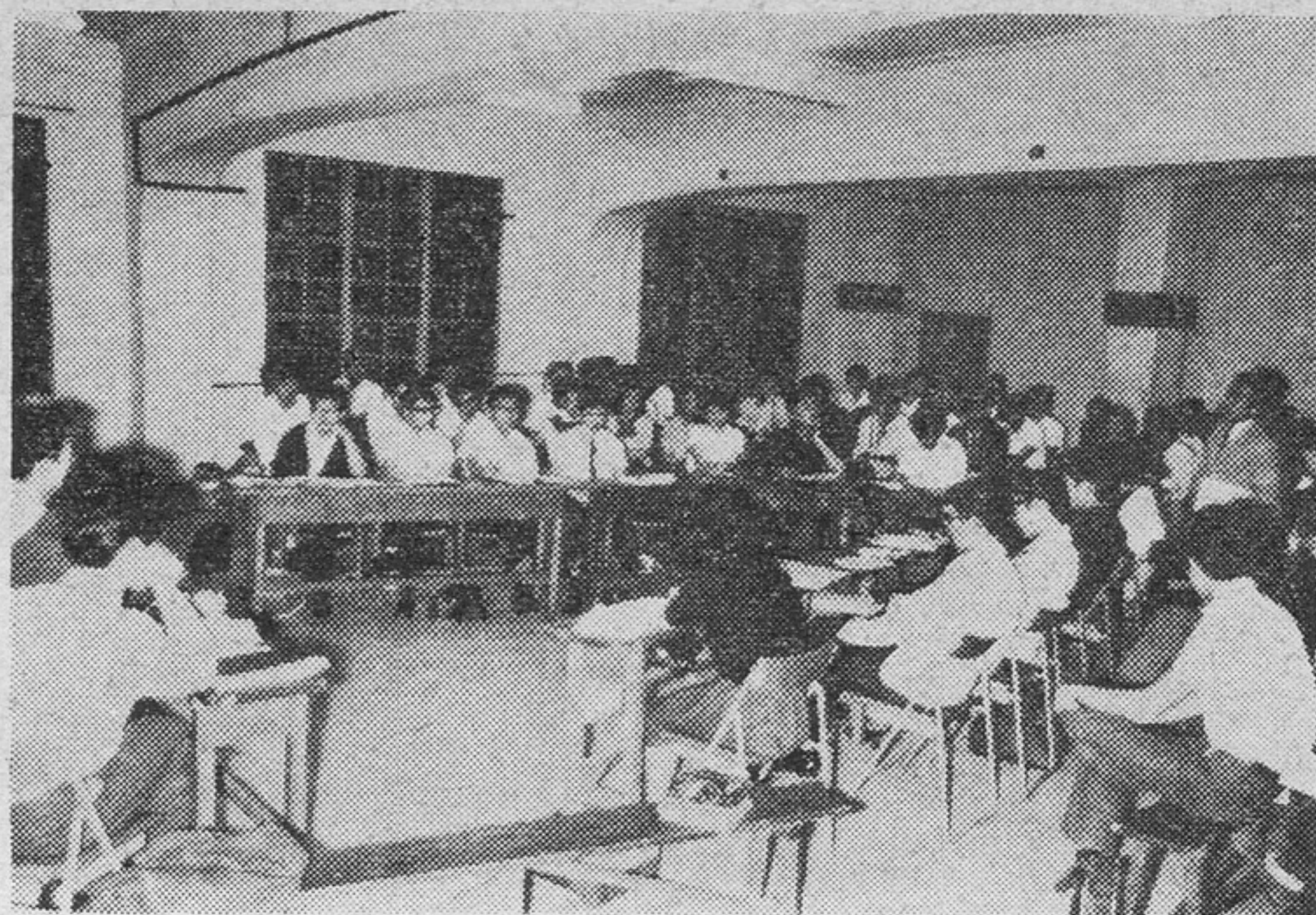


以上のことが企画局から提議された、シンポジウムが進行されるに従って低迷の原因と思われることが序々に明確になってきた。「共同制作に於て最も重要とするものは、個人即ち個性の尊重である」という主張が述べられ、その主張に対して「個人は尊重する、プロセス（話し合い）は重要である。しかしサークルに入っている以上、最終的には個人のそれより集団のそれを重要視すべきである。」「个性的であるということは、妥協しないということである。しかしそういう人間が集まるのであるから妥協なしではやってゆけない」ということが主張され、前者の主張を理想論とした。ここに於ける主張の対立で明確になったことは、運営者と一般部員との問題であった。運営者はサークル内を如何にして波乱のないようまとめ、統一しようとするのである。故に運営者が考える共同制作は、統一の一手段として考えるのである。その後「個性」「集団」等々について討論されたが運営者は運営面に固執し、本質を説く者は本質に捕われその域を脱することなく第一回目のシンポジウムは終始した。第二回目のシンポジウムは6日後、21日同じ明治大学に於て開催された。最初に企画局から共同制作の本質を考えるのは理想であるとの前回のシンポジウムの際の主張に対し、全くの現実的な問題である証明すべく具体論が提出された。それは共同制作を行う基礎的な条件とされいくつかの条件が提出された。

- 一、1. 写真というものは人間に感動を与えることが出来る。
2. これから活動するためにサークルがどのような活動をしてきたか。
3. 写真サークルとは何か。
4. 実際に写真を撮る。

- 二、1. 写真を並べる意味を理解する。
2. 写真を批判出来る状態になる。

また、新入生に対する指導法として、最終的な決定権は個人にあるというサークルの原点から写真サークルに於ては個人が現実と対決した時一個人が現実の自己の意味について知りたいと思った時にシャッターを切る。写真というものは自分の感じたこと考え方を表現出来る。つまり写真は自己表現の手段となり、自己意識を発展させることが出来るということを理解させるために、討論会あるいは撮影会を開く。更に共同制作のもう一つ条件として、サークル全員がクラブの条件——例会、討論会撮影会等——を作っておき、更にお互の力量——新入生指導方法に於ける意志表現——をも知っておく必要があるとした。企画局からのこの条件について討論を重ね、更により具体的なテーマの選定、決定等が各大学から報告された。前回のように運営者が運営面のみに固執することなく、本質を主張する者が本質に捕われることなくより具体的に如何にして真の共同制作を遂行することに



より低迷を打破すべく姿勢のもとに、運営者と一般部員の問題、集団と個人の問題、テーマとは如何なるものか、そしてテーマの決定方法については対立した場合等が討議された。しかしすべての問題について必ず何らかの形で現われる問題があった。それは集団と個人の問題である。この問題の解決なくしてはすべての問題の解決はみないようであった。サークルに於ける集団、共同制作に於ける集団とは如何なるものであろうか。それを解明すべく一つ一つの発言であった。集団とは、決して個の加算的なものではない、数学的なものではなくして $1+1=2$ ではなく、2にも4にもあるいは10にもなり得るものである。そしてこの集団に於ける個とは、個人々々は常に現実と直面している。しかし個と現実との接点は各々の現実との接点は各々がすべて異なる。現実とぶつかるのは常に個であり集団ではない。各々が各々の現実との接点にシャッターチャンスがある。接点に相違があるからこそここに於て対話（言語、映像）の必然性が存在する、個の総体が集団の総体となり得るのである。この集団に対する発言を具体的なものとするためにかっこうな一つの疑問が提出された。共同制作に於て主張することはひとつでなければならないのではないかその方が効果として強いものが生じるのではないかという質問に対し集団に於ける個人すべてが同意見を主張するということは、個人々々すべての現実が異なるのであるから殆んど不可能である。例えばレアウトの際。全員が同意見であるなら一枚の写真で充分ではないから同じ事を何度もいう必要は無い。一つのテーマに対して異なるからこそ、そこには共同制作の必然性があり、異なる主張の写真を並べることにより、そこに生じる主張と主張との葛藤、インパクトが見る人を感動させるのである。という主張がシンポジウムに参加した大勢を納得させた様でした。企画局に於ては、この主張をより具体的にするため第三回目のシンポジウムを計画中です。

関東企画局 村山淑子



# ●全日コン締切 10月31日

小学生から大学生までの学生を対象とする全日本学生写真連盟・主催写真コンクール（略称 全日コン）も回を重ねることここに第12回を数えることになりました。

ここで過去の全日コンを振り返り、全日コンの主義、又全日コンはどうあるべきかについて考えてみたいと思います。

## ◇ 第12回 全日コン ◇

従来の全日コンに於いて、全日本学生写真連盟が主催でありながら、具体的に連盟が全日コンに関与していなかったように思います。第12回全日コンは“われわれ学生のためのもの”と云う大前提のもとに、アサヒとの共催及び富士フイルムの後援を得てユニークな学生写真コンクールとなるように盛り上げてゆきたいと思います。

第12回全日コンの具体的な新しい試みとしては、従来共同制作が学校代表一辺倒であったのを止め、新にフリーグループを設け、学校代表の部とフリーグループの部とに分けました。前者は高校生・大学生を対象とし、後者は小学生から先生までを対象とし、グループ構成は全く自由としました。また審査員人選問題もアサヒ新聞社、富士フイルムに対して学生側より希望審査員を提示し、最終的にアサヒ新聞社、富士フイルムとの三者の話し合いで決定致しました。連盟本部は審査員人選問題を重大視し、最大限に学生側の要望も取り入れるために折衝致しました。今後も“学生のための全日コン”と云う大前提を踏まえ、最大の努力を払い、学生側の要望を取り入れて行きたいと思います。

## ◇ 連盟 = 会員 ◇

過去の全日コン（特にここ数年）を振り返って見るに量的にも、質的にも低迷しているように思う。一体、その低迷の因はどこにあるかを考えて見ると、数量的には応募点数こそ二万余点であるが、これを応募者数にすれば約七千人である。ところがこのコンテストの応募資格は会員以外の学生も応募できるのであるから、本連盟会員三万五千余名（37年度調査）からみれば、会員応募者は全応募者数の1/3にしかない。いかに全日主催の全日コンに会員の関心が薄いかがこのデーターでうかがわれる。また質的には、高等年、特に大学生に於ける単作が組写真に比べて著しく低調である。このことは中島健蔵氏が「社会的な問題を捕えて表現する組写真などでは年令の上の人々の方が強いのは当然である。ところがファインダーを通して外界を捕えるというだけのことになると年の若い人々の作品に素直で鋭敏なものが多く、これは考えさせられる事実である。」と第11回全日コン総評で指摘されているように、確かに低学年、特に小学生・中学生等のファインダーを通しての現実接点へのアプ

ローチはリアルで素直なものがあるが、高学年特に大学生になるとテクニックを屈指するあまり、素直に被写体を見つめる気持が薄らいでしまい傍観的アプローチとなり模倣的になってしまうように思われる。

以上を熟考して見るに、数量的減退は全日コンの具体的な実施方法に魅力が欠けている表われとして考えることができるかと思う。しかし質的低下は各個人の自覚以外の何ものでもないと思う。いかに各個人が自覚を持ち良い作品を製作するかによって自から解決してゆかなければならない問題かと思えます。我々が今後の全日コンの発展を期するならば、この両者が一体とならなければならないと思えます。両者一体になってこそ学生写真の新しいジャンルが形成されると思えます。

## ◇ 全日コンの意義＝その有り方 ◇

前委員長津田一郎氏は「全日コンの特色は若い世代が産み出す何か新しい可能性を目指すものがなければ、全日コンの意義も目的も失われてしまう」会報52号“全日コンを振り返って”で述べているように、我々小学生は将来に対して大きな抱負をいただき高い要求水準を持ち、また大きな可能性をも秘めているように思う。

我々が今考えなければならないことは、我々は学生であり、一社会人（社会的集団の個人）であるが、しかし大人ではないと云うことである。現在あまりに未熟である我々が大人になりきるには、将来前途多難な問題を経験し、それを蓄積していかななくてはならない。したがって現在の学生の立場において、一番大切なことはいかに自己の現時点の状況を認識し、自己を洞察し、自己の存在を見つける個人は自己（主体）と自己をとりまく集団的環境（客体）との間で矛盾と対立を繰り返し、それを経験しながら進歩がなされているからである。そのような環境におかれている我々が自己の存在を見いだそうとした時、つまり我々がファインダーを通して外界の事物を捕えようとした時、自己と現実（被写体）は切り離して考えることのできない自己と現実との接点つまり限界状況が呈されるのである。その限界状況の意識こそ、我々学生のユニークなジャンルが形成されうるのではないのでしょうか。またそれが全日コンの意義であり、目的のように思います。

全日代表委員全日コン担当 鈴木 政 功



## ■キャンペーンとぼく

### ＜好きな言葉＞

ぼくがとても好きな言葉がある。「幻影を捨て去ればたとえ渾沌のなかにあっても、あらゆることが判然としてくるものである。そもそもの当初から、渾沌以外のなものもなかった……私はすぐ、あらゆることに矛盾と対立を見、現実と虚構のあいだの風刺と逆説を感じとった。私自身が私の敵だった。」これは、アメリカの作家H・ミラーの言葉である。ぼくのキャンペーン参加の根底は、これであった。というより、ぼくのすべての活動の底には、これがあるべきである。

### ＜高校時代＞

高校時代、すべてのものが中途半端につくられたり、こわされたりしていた。ちょっと、突込み過ぎると、終焉は雪解けの道のようなようだった。その結果として、ぼくのこころと肉体は、虫歯のように黒ずんで悪臭を放っていた。テレビでは、ケバケバした塗料とブリキでつくられた夜店の玩具、そのもののような同年輩の歌手が歌っていた、やせっぽちで、ひきつけを起した子供だった。ちょうどその頃、ぼくは田舎の高校で、いかにも割り切ったというような大学出の若い教師のスピードに押しまわられていた。ぼくらの学校にくるとすぐ、彼は進学係になった。彼がぼくらに言ったことは、年に似合わず、随分苦勞人じみていた。だから、それは若僧の金の指輪のようにキザだった。つまり「Reculer pour mieux sauter（屈するは伸びんがするため）」というのであった。だから、ぼくはひざを折ってしゃがみ込み、冬の陽だまりでくびをうなだれて、ムニャムニャと暗記を繰り返した。はじめその暗記は、その頃ぼくがその教師の母親への忠告(?)でやめさせられた。ラジオの組み立てのジャンク箱の中の部品のようなようだった。それがやがて10円玉を入れると、ジャーと出るジュースの自動販売機のように、整然となった時、その若い教師は、いかにももっともらしくほほえんでみせた。教学は考えるものだと、岡潔のことを一年の時話してくれた教師は、もうとっくに受験用の解答の方法を教えていた。ぼくはそこに最も安っぽいたてまえと本音の理想と現実の無条件、無媒介、無交渉の茶番劇を感じとっていた。そんなわけで体育の時間のラグビーだけが、ぼくの唯一の真実だった。ぼくはいつもForwardで、Tackleをやりまくった。しかし、ぼくの心の中には、徹夜の後の異様な熱っぽさが、たまっていた。

### ＜大学と東京＞

やがて、大学に入った。ぼくは高校時代の臭いのするものを、汗臭いシャツを脱ぐように脱いだ。新聞と雑誌

と街に熱中した。大学はまるで安っぽかった。大学の学問は、ぼくに分類しか教えない。大学の学問は、にじみ出る何か、つき上げてくる何かを伝えてくれなかった。つまり、実感がなかった。一方、東京は、ゲル状またはケロイド状だった。ぼくは、ねばりつく体を感じた。そこに、ほこりや、読み古るされた新聞やスモッグが付着していった。手を触れるところ、かならず、噛みに噛んだチューインガムがあった。「しあわせ」そんな人はいなかった。街を行く人は、大人も子供も、男も女も、いつか外国映画で観た、被爆された跡の人のように、うつろな眼や、ギラツいた眼をしていた。しかし、蒼い顔は、異常にあぶらぎっていた。毎朝、毎夕、吊り革にぶらさがり嘔吐しそうな顔をして、仕事に行ったり、帰ったりしていた。仕事と家庭は分離するというのが彼の一致した生活についての信条のようだった。猥雑は女性週刊誌は、それと、それ以外のもっとケチな生活の信条を欲望と不安と不信で、小きざみに震え、いらだっている女たちに吹き込んでいた。

### ＜しかし………出発＞

しかし、感ずるそれは、ぼくにとって本質的な、大きな言い方をすれば生きている状態であった。そして、決定的なものであると感じられた。だから、受験の時のように安易な妥協は許されなかった。ぼくは身構えた。そして、ますます粘りついてゆく自分を感じた。そしてぼく自身がゲルやケロイド状になってゆくようだった。「屈する」わけにはいかない。そうしたら永久に「伸び」られないだろう。しかし、自分のポジションもタックルする相手も、見つからなかった。ぼくはいらだった。そんな時、冒頭のH・ミラーの言葉にぶつかったのである。そしてぼくは彼の言葉で、更に深いトライを試みようとして決定的に考え始めた。「混乱とは、解明されていないひとつの秩序を名づけるためにつくられた言葉である。私は事物がいまや形を整えようとしているこの時期のことを考えることが好きだ。この秩序は、もし解明されたならば、さだめし目くるめくものとなるにちがいないからだ。」これは、ぼくの出発についての長い代名詞であり決して形容詞ではなかった。

### ＜キャンペーン＞

自分の生活の中に巣喰っている幻想を捨てきり、この「こじつけと不眠症」の時代を、正確に捕えるためには弱さと憶病を区別しておかなければならない。人間というよりも生きるものすべて弱い。自然に対してまた、疎外された今となっては、自分自身にとっても弱い。しかし、憶病ではない。憶病とは、やるべき時にやらないもののことだ。そして方法が環境と自己の接点で決定されねばならないことを知らなければならない。そして、小を集めて大となし、微を積んで顕としなければならないことも、心に深く打ち込んでおかねばならない。それがキャンペーンの実質的に推進するものとなるだろう。最後にもう一度H・ミラーを「心を変えないかぎり、なにごととも変わらないと、私は確信していた。」

キャンペーン委員生



52号で会長の名が洩れましたので、ここに改めて掲載します。

茅 誠 司 (前東大総長) 東京都渋谷区神宮前5の4

又、全日代表委員(全日コン担当)として、

鈴木 政 功 (学習院大学) 神奈川県平塚市須賀 1269

が全日6月総会で承認されました。

——全日本学生写真連盟が推薦した本を、今回から掲載したいと思います。——

## ▲「共同制作」

(タイプ印刷) ¥50

関東学生写真連盟企画局が、共同制作の行き詰まりを痛切に考じ、新しい方向を見つけ出そうとシンポジウムを開いた。(今回は第一回のもので、近日中に第二、第三が出ると思う)

## ▲「写真芸術事典」

写真同人社 ¥ 620

会員・クラブの研究資料としての秘蔵書

☆ 写 真 集

## ▲ザ・ファミリー・オブ・マン

編集者 エドワード・スタイケン

¥ 900

明確なレイアウト技術を駆使して、現代に於けるヒューマニズムを謳いあげた名作

● 残部僅少

## ▲「地 図」

川 田 喜 久 治

¥ 2,000

僕と、この世界の暴力的なるものとの、最初の出合いの日の思い出は、ある戦争の終り近いころのことで、地方都市に遠足にでかけて行った僕が、行列にはぐれて途方にくれていると、突然あらわれた年上の男が、やにわに僕を殴りつけたのだった。

僕はひっくりかえり

地面に頬をおしつけ

そして傷ついた眼のすぐまじかに、ひとつの地図をみた

それは重油にすぎなかったが僕には、それがこれから生きていくべき暴力にみちた世界の地図のように見えたのだった。(中略)

天窓の光輝、菊の紋章、原爆ドームをめぐる光、皺だらけの日の丸、軍艦旗、それらすべて暴力的な光の所在をあかしている。この地図をひらいて旅立ったわれわれは、どこへたどりつくべく旅立ったのか?

〔(MAP)より 大江健三郎〕

写真集・「地図」は、直接、本部代表委員(52号会報掲載)宛に、その他は、各地区連盟宛に、申し込み下さい。

# 54号 会 報

# 41年1月発行予定

■ 特集 全日コン入賞作品掲載

★ 各地区連盟、今年度の抱負を語る

## Young Eyes

53号

昭和40年9月20日発行

編 集 人 全日本学生写真連盟会報委員会

代 表 北 川 尊 久

発 行 人 全日本学生写真連盟

委員長 三 崎 徹

印 刷 所 有 限 会 社 親 和 印 刷



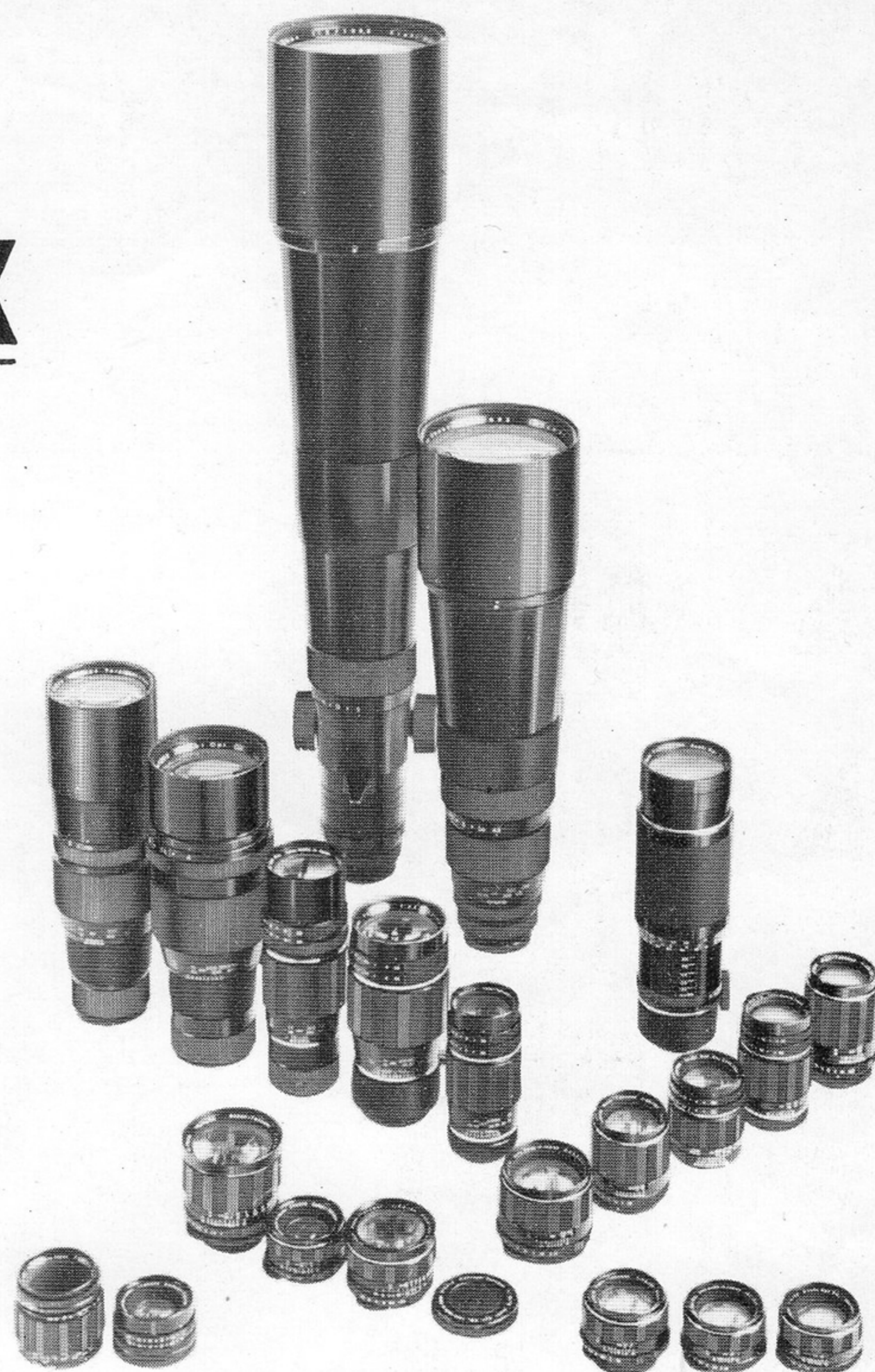

**世界の名機**  
**ASAHI / PENTAX**

傑作を生む名コンビ  
**TAKUMAR LENSES**



東京都千代田区永田町1の29  
 三宅坂ビル

**旭光学**



全日カメラキャンペーンの成果

# 「状況—1965」

1965年とは一体いかなる年であったのか？

この本はその間に

'64・10～'65・9 に全日会員が撮影した作品  
 // の刊行物から抜き書きした引用文  
 // の詳細な国内外の年表

1965 に関する論文

をインパクトさせ、正面から答えようとするものである

発行1月上旬 出版賛助金 ¥280 詳細は各地区連盟まで  
 この本の発行により、全日は画期的な進展をめざしております。  
 会員の皆様の多大な協力をお願いします。



# ネガタイプも リバーサルも 100で揃えた フジカラー



新発売

感度 100

〈カラーのSS〉

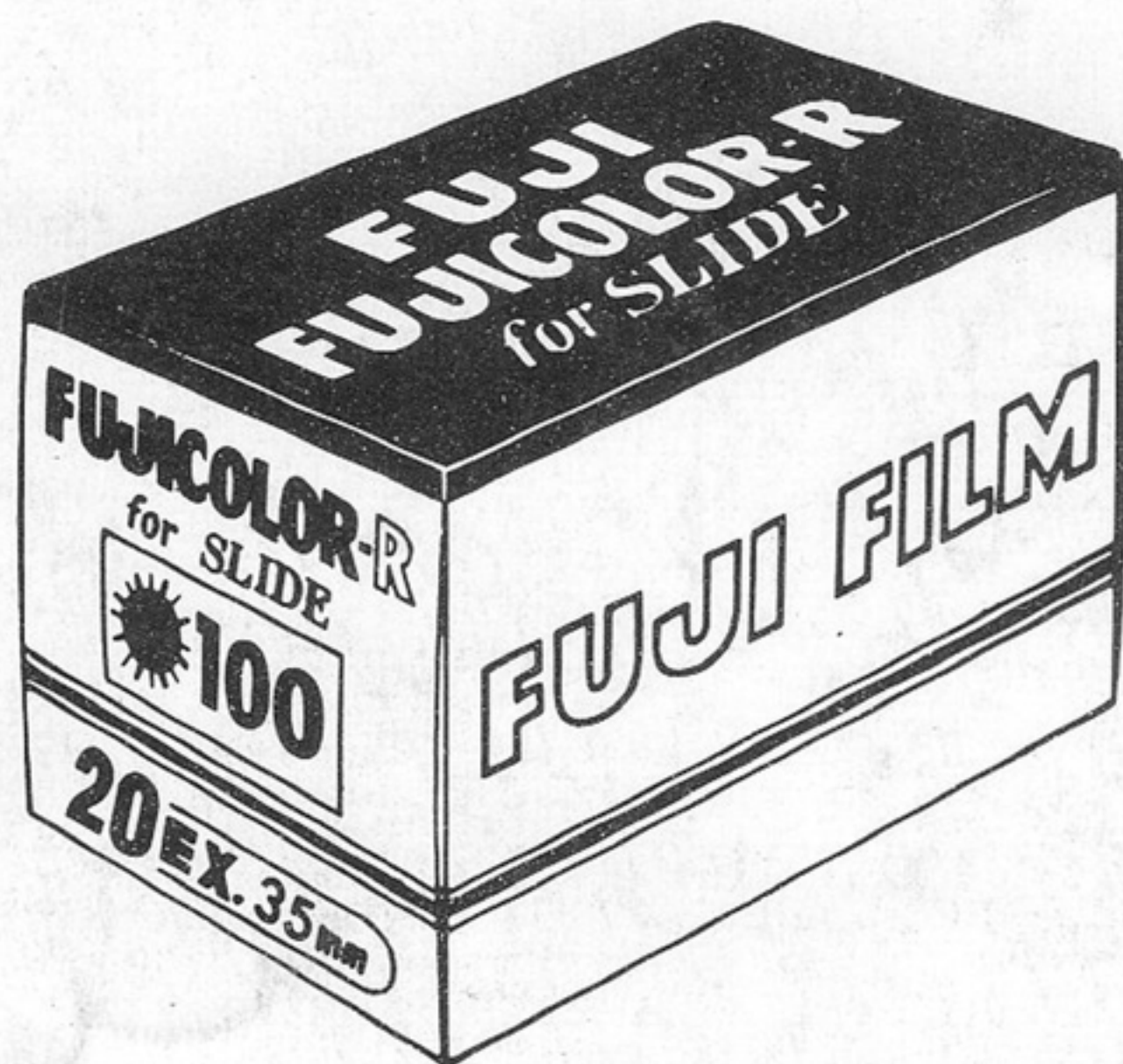
世界のカラー



35mm 12枚撮 290円 20枚撮 420円  
(現像料別)

より使いやすい…よくご存知の黑白フィルム・ネopan S Sとまったく同じ要領で、美しいカラーが撮れるようになりました。

より美しい…オレンジ色のネガの威力を100%発揮したフジカラーの独壇場  
より買いやすい…カラーフィルムの値段から現像料をのぞいてグリーンとお求めやすくしました。撮影後も、黑白フィルムと同じ要領で写真材料店へどうぞ。  
カラープリントは〈フジカラープリント〉とご指定ください。



美しいカラースライドに



35mm 20枚撮 740円 6×6cm 6枚撮 530円  
(各現像料込)

富士フイルム